

---

# コナン v s キッド v s ハヤテ

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コナンvsキッドvsハヤテ

### 【Nコード】

N0004C

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

ある日三千院家に怪盗キッドからの予告状が届く、嫌がるナギによそに、クラウスは小五郎に依頼し、そしてコナンも一緒に三千院家へ、ここにキッド、コナン、そして借金執事ハヤテのバトルがスタートする。

## プロローグ（前書き）

この作品は例によってコナンと別作品のコラボです。その手の作品がだめな方はここでお戻り下さい。

## プロローグ

ある日の江古田町。

今世を騒がせている怪盗キッド。その正体はこの江古田町に住む高校2年生の黒羽快斗である。

彼が怪盗キッドをやっているのは父親を殺した真犯人を突き止めるためと、その連中が狙っているパンドラと呼ばれる宝石を破壊するためであった。

しかし、いくら宝石を盗み続けても中々パンドラは見つからないし、そして父親を殺した連中の正体もわからない。そして盗むたびに彼の心のわだかまりは大きくなっていく。

そんな今日この頃、彼は1人で江古田高校から帰宅するところであつた。

「いつになったらパンドラは見つかるんだろう。」

1人そんなことを呟く快斗。言っでどうなる物でもないが、こう見つからないとそうも言いたくなるのだ。

「パンドラが目の前に落ちていたらな。」

そんな馬鹿なと自嘲しながら、歩くのをやめふと足元を見てみると、そこになんと宝石らしき物が落ちていた。

「・・・・・・何かの冗談かな？」

有り得ないと思いながら、それを拾い上げてみる。そして持った瞬間、彼自身の経験によりそれは本物とわかった。

「ほ、本物だ。」

宝石はどうやらダイヤのようだが、でかい。十分数億になりそうだ。さすがに月にかざさないとわからないが、もしかしたらパンドラかもしれない。

それをもって帰ろうと、鞆に入れようとした時、後ろから声をかけられた。

「あ、あつた!!」

「!？」

声のした方を見ると、自分と同年代の青年と、12、3歳ぐらいの少女がならんで立っていた。

「いやあすいません。あなたがそれを拾ってくれたのですが？」

「え!は、はい。」

「そうですか。すいません。実はその宝石、お嬢様が落としてしまった物で。」

青年がそう言った途端、少女が不機嫌な表情になる。

「こらハヤテ!落としたのではない!落ちてしまつてたのだ!!」

「はいはいお嬢様。」

どうやら持ち主らしい。

「え、じゃあこれはあなた方の？」

とても子供が持つ物のゆには見えない。しかし目の前の青年が嘘を言っているようにも見えない。

「だつたらお返しします。」

「そうです。では、ありがとうございました。」

さすがに目の前に持ち主がいるので持ち帰るわけには行かず、快斗は宝石を青年に返した。

青年は宝石を少女に渡した。

「はいお嬢様。」

「うん。」

「では、私たちはこれで、本当にありがとうございました。」

青年は快斗にお辞儀した。

「いえ。」

そして二人は行ってしまった。

この瞬間、怪盗キッドの次の仕事が決まったのであった。

## プロローグ（後書き）

次回更新は3日後の予定です。

## その日の三千院家（前書き）

今日からタイトルを変更します。

## その日の三千院家

ある日の三千院家

その日も、この屋敷の執事である綾崎ハヤテはいつもどおり、門に付けられた郵便受けをチェックすべく、その扉を開けた。

社交界へのお誘いや、なにやら高級品の宣伝等の封筒が沢山入っている。もっともこの家の主人である三千院ナギはこういうものにはあまり興味を示さない。行きつけの店で大体揃えてしまうからだ。大方開けられぬままゴミ箱行きがオチだ。

と、その中に見慣れない封筒があるのにハヤテは気づいた。

「なんだろう？」

それは宛名も差出人も書いていない真っ白な封筒であった。

「また脅迫か何かかな？」

すさまじい財を持っているナギは時として暗殺のターゲットになれることもある。脅迫まがいの手紙も多い。

ハヤテはその手紙の中身を念のため確認してみる。

手紙を一読した瞬間、彼の目は見開かれた。

「これは――！」

彼はすぐに屋敷へ走った。

屋敷に入り、長い廊下を走り、そして居間の重い扉を開けた。

「お嬢様――！」

部屋の中には、食事中の少女が1人いた。弱冠13歳にしてこの屋敷の主人である三千院ナギである。

「どうしたのだハヤテ？血相変えて。」

「大変ですお嬢様。こんな手紙が届いていました。」

そうして彼はその封筒と中の手紙をナギに手渡した。

「また脅迫の手紙か？」

うんざりした顔で手紙を受け取るナギ。

「いえ、そうじゃないんです。」



「何!？」

ナギは手紙に目を通す。

内容はこうであった。

3月20日 あなたのお持ちのダイヤのブローチを戴きに参上する。  
怪盗キッド。

怪盗キッドからの予告状である。

「ど、どうしましょうお嬢様!？」

ハヤテの慌てぶりとは対照的に、ナギは表情を変えずに言った。

「これがどうしたというのだハヤテ？」

「はい!？」

「こんなの良くあるいたずらあ何かだろう?」

その言葉に、ハヤテは開いた口が塞がらなくなった。

「あのお嬢様、もしかして怪盗キッドを知らないのですか？」

「知らない。」

そっけない一言。

さすが良家のお嬢様。今世間を騒がす大怪盗などにまったく興味はないらしい。

「お嬢様。怪盗キッドというのはですね……」

ハヤテはここでキッドのことを1から丁寧に説明した。

「……という世間を騒がしている大怪盗なのです。」

「ふーん……けどまあダイヤの一つぐらくれてやつても。」

またとんでもないことを言うナギ。まあ即金で1億5千万の現金を軽々と出す彼女にしてみれば、ダイヤの価値などその程度であるう。

しかし、ハヤテはあることを指摘した。

「しかしですよ、もしキッドが狙っているのがあのダイヤのブローチだったら。」

「は!！」

あのダイヤのブローチとは、こないだナギが落とし、快斗が拾ったダイヤのことである。実はこれ、彼女が8年前に死んだ母親から受継いだ形見の品の一つだ。先日ハヤテがクローゼットの中を掃除をしていた最中に見つけ、久しぶりに彼女はそれを友人のパーティーに彼女は付けていった。その帰り道、危うくなくしかけたが、なんとかその時は見つかった。

無くしたとわかった時のナギの悲しそうな表情を覚えているだけに、ハヤテはもし奪われてしまったらと心配だった。

「あの時お嬢様を見かけて狙ってきたのかも。……とにかく警察に連絡を。」

電話をとろうとしたハヤテ、しかしそれをナギが止めた。

「お、お嬢様!?!」

「待ってくれ。もし狙われてるのがあのブローチなら、私は私自身で守り通したい。お願いだハヤテ。」

警察には言わないでくれ!!」

「しかし……わかりました。取りあえず警察には連絡しません。とにかく、僕はマリアさんとクラウドさんにも伝えてきます。」

「ありがとうハヤテ。」

ハヤテは急いで部屋から出る。そして走った。

（お嬢様を傷つける奴は誰であろうと許さない!! お嬢様は僕が守る!!）

そう心に誓いながら。

## その日の三千院家（後書き）

次回更新は明日、または月曜日です。

## その日の三千院家下 あるいはその日のコナン

「ふむ。予告状ね。」

予告状を見ながらそう言うのは、三千院家執事長のクラウスだ。

「けど、防犯ロボットが屋敷中にあります。SPの方々もいますし。その怪盗キッドといえど入ってこられないのでは？」

樂觀的な意見を口にしたのはこの屋敷唯一のメイドであるマリアだ。やはり彼女もキッドを知らないようだ。

「マリアさん、それはキッドをあなどっています。キッドは今まで何度も絶対に突破不可能といわれた防衛網をすり抜けて獲物を盗み出しているんですよ!!」

「けどハヤテ君。SPの方たちよりも弱い警察を呼んでどうかなるでしょうか？」

「う………」

三千院家では屋敷内で働いている人間は数えられるほどしかない。それは主のナギが極端に使用人嫌いだからだ。だが屋敷外の敷地内にはそれこそ蟻一匹入れないとばかりにセキュリティロボットとSPが24時間監視しており、さらにそれらの武装も、バルカン砲にミサイルといった警察の特殊部隊以上の物を持っている。

ちなみに、ハヤテの知る限りでは三千院、愛沢、鷺ノ宮といった名家には銃刀法違反という法律はなぜかないらしい。

「しかし彼の言うとおり万全の態勢で挑み、三千院家の安全を守るのも我々使用人のつとめですよマリアさん。」

「ではクラウスさん。何かいい方法があるのですか？」

「力だけではいけませんよマリアさん。頭の面でも守りを固めるべきだと思います。だから、探偵を呼びましょう。」

このクラウスの決断により、この話は大きく動き出すこととなる。

同日夕方毛利探偵事務所

この日も、江戸川コナンはいつものどりの時間に帝丹小学校から帰ってきた。

「ただいま。」

事務所の扉を開けると、客用のソファーに1人の紳士が座っていた。

「あれ、お客さん？」

「ああ、コナン帰ったのか。あ、すいません。こら子供は上へ行け。」

「いや、かまいませんよ。息子さんですか？」

「いえ、こいつは居候でして。」

「ああ、そういえばキッドを手玉に取ったという少年ですか。ならば彼にも一応聞いてもらう必要がありますな。」

そのキッドという言葉にコナンは敏感に反応した。

（キッド！！？！）

「はあ、まあいいでしょう。で、キッドからの予告状では3日後にダイヤを盗みに来ると書かれていたのですな。」

「そうです。まあ三千院家のセキュリティは万全と言う自負があります。しかし念には念をいれるべきだと我々使用人は考えまして今日つかがったしだいです。」

クラウスの言葉に、小五郎が疑問を持った。

「待ってください。ではあなた方の主が読んでいるわけではないのですか？」

「はい。何分負けず嫌いな性格でして。警察に通報するのも拒んで  
います。」

（警察に連絡しないって、よっぽど負けず嫌いな性格なんだな。）  
コナンの率直な感想である。

「しかし、主の許可を取っていないとなると。．．．．．わかりま  
した、私がまずその方を説得してみましよう。そしてダイヤも守っ  
て御覧にいれましよう。」

「わかりました。では明日の昼車を差し向けますのでそれにお乗り  
ください。」

そしてクラウスは帰っていった。

「ふん。三千院家ね。一体どんな頑固な主人なんだか．．．」  
小五郎が貰い受けた名刺を眺めながら言った。

しかし、コナンにはどこかその名前に聞き覚えがあつた。

（三千院．．．．．どこかで聞いた覚えがあるんだけどな．．．

）  
最終的にコナンが答えにたどり着いたのは夜のことであつた。

その日の三千院家下　あるいはその日のコナン（後書き）

次回更新は月曜日の予定です。

## その日のコナン・快斗・・・

その日の夕方毛利家

「えー！三千院家？お父さん冗談言ってないわよね。」

夕食の時間、蘭が小五郎から聞かされた今日の依頼人に関する話に対しての第一声である。

「冗談じゃねえよ。けどそんなにすごいのか、三千院家って？」

「園子から聞いた話だと、鈴木財閥が足元にも及ばない世界有数の大財閥だって。」

その言葉に、コナンは思い出した。

（そうか、確か三千院家っていつたら大財閥だ。普段はあまり表に出ないから聞かないけど・・・でも、あそこの当主って誰だ？）  
さすがのコナンもその当主が13歳の少女とまではわからなかった。

「蘭、その話本当か？あの鈴木財閥よりすごい会社があるのかよ？」

胡散臭い目で見える小五郎。どうやら彼は半信半疑のようだ。

「わかんない。園子に聞いたただだから。」

蘭も断言できる材料を持っていなかった。

「まあ明日になればわかるでしょ。」

コナンが相槌を打った。

「ま、そうだな。」

こうして毛利家の夜は深けていった。



一方、予告状を出した快斗は困っていた。

「まいったな……」

今回彼が困った点は、三千院家に関する情報があまりないという事だった。

インターネットやその他あらゆる手段を使って情報収集に努めたが、わかったのは当主が弱冠13歳の少女であるナギであることと、その屋敷が練馬にあることだけであった。もちろんその屋敷についても調べたが、地図にはその広大な広さしか示されておらず、また今はやりの衛星からの調査ではなぜかその部分だけ真っ黒で要領を全く得ない。

「まさか警察を断わるなんて。」

そんな広い屋敷だから不用意に潜入するのも難しい、そこで警官にばけるベタな手段を試みるべく、快斗は三千院家に予告状を出したが、ナギは警察の介入を嫌がり断わった。これが第一の計算違いであった。もちろん、警察、つまり警視庁二課にも予告状を出したが、どういいうわけか警察も動いていないようだった。

「あの中森警部が出ないはずはないんだけどな。」

実はこれはナギがコネを使って握り潰したのが真相であった。もちろん、中森警部は出勤しようとおの手この手を使っているのを知らない。

「ぶつつけ本番で行くしかないか。」

最終的にはそうなった。

しかしそうなると色々準備が必要であった。こんなことは今まで殆どなかったから細心の注意が必要となる。

「とにかく、寺井のじいさんにも情報収集を頼むか……」

こうしてキッドも動く。

一方、ハヤテ、コナン快斗ともう一つ動いている者達がいた。なんとそれは黒の組織であった。

彼らの中で、宝石強奪専門のスネイクは、キッドの獲物を横取りすべく動いていたが、

今回警視庁に届いた予告状もいち早く察知していた。

そこで、早速あの方に許可を仰ぎ動こうとしたが、待ったがかかった。

「あの方の許可はまだおりないのか？」

「それがまだです。」

「くそ。」

部下に怒鳴り散らすが、それでどうとなるわけではない。

（しかしなぜだ。なぜ今回あの方は許可をしるんだ？）

パンドラを得るためならあらゆる手段を許可してきたあの方にしては不自然であった。

これには理由があった。それはナギの祖父の帝であった。

三千院家は総資産が兆単位のまさに大富豪であるが、その本家はナギの祖父である帝が取り仕切っている。あの方はその帝を徴発することを恐れたのだ。三千院家を怒らせたりしたらそれこそ大変である。例え黒の組織といえど被害を喰らう可能性があった。

というわけで、黒の組織が動こうにも、あの方がビビッているため動けないのであった。

その後、一応動くことは許されたが、スネイク達には厳しい条件が課せられることとなった。

その日のコナン・快斗・・・（後書き）

ご意見・感想お待ちしています。

次回更新は水、もしくは木曜日です。

## いざ、三千院家へ

翌日毛利探偵事務所

クラウスの言ったとおりの時間に、三千院家の車がやって来た。それに乗り込み、3人は三千院家に向かった。

3人とはつまり蘭とコナンも付いていくということだ。

最初小五郎は、2人が付いていくことに渋い顔をしたが、クラウスから別に家族連れでもどうぞという申し出を受けて、コナンと蘭の行きたいという言葉を断わりきれず、連れて行くこととなった。

車は米花町から、三千院家のある練馬区に向かった。

乗り込んでみて、3人はその車の豪華さに驚いた。

電話に冷蔵庫等がついていて、さらにガラスは防弾ガラスである。これだけでも三千院家の凄さが垣間見える。

「こりゃあ蘭の言ったとおりかもしれないな。」

ボソツと小五郎が呟いたが、コナンも同意見であった。

（本当に三千院家の当主ってどんな人物なんだ？）

コナンの頭の中はそれだけを気にしていた。

## 30分後三千院家

この日朝から三千院家は騒がしい。何台もの大型トラックが出入りしているからだ。ハヤテが気になって屋敷から出てみると、続々と巨大な鉄の塊がトラックから庭に降ろされ、姿を現した。

それはキャタピラを付け、細長い銃みたいな物をつけた、戦車のような物であった。

「あのう、これは何でしょうか？」

ハヤテはその鉄の塊を受け取っていたSPに聞いてみた。

「うん？これは対空戦車だよハヤテ君。」

対空戦車とは、文字どおり敵の飛行機を打ち落とすための戦車のことで、砲塔の外側に長い銃身を持つているのが特徴である。

ちなみに、この手の兵器は単価が高い（10億以上する）せいで、自衛隊も年に数両しか生産していない超高価格兵器である。

それが都合6両揃えられている。

「で、なんでそんな物を？」

「我々の調査によれば怪盗キッドは空からグライダーでよく現れるそうじゃないか。だから空から来てもいいように急いで、菱と小製作所に頼んで持ってきてもらったのだよ。それだけではないぞ、日本 鋼にも注文して対空機関砲も4基買い込んだ。これで三千院家の空の守りは完璧だ！！」

「はあ。」

なんとまあレベルの高い買い物だ。

ちなみにここで何故銃刀法違反にならないかを突っ込んではいけない。

「しかしこれで驚いてもらっては困るよ。今回は牧村さんに頼んでセキュリティロボの改造強化も行ってもらった。そういうわけだから、お嬢様には屋敷には誰一人不審者は近づけないと伝えておいてくれたまえ。」

牧村さんとは三千院家傘下の会社でロボット開発をしていた牧村志織嬢のことだ。ちなみに彼女は開発したロボットによる不祥事で今はハヤテの通っている白皇学院の教師に左遷されている。

もつとも、そのプロトタイプに襲われたことのあるハヤテとしては、さらに改造強化したという言葉に恐ろしくなってきた。

「わ、わかりました。」

そう適当に答えておく。

と、そこで屋敷の門から車が一台入ってくるのが見えた。

「あ、お客様のようです。ではこれで。」

「おう。」

ハヤテはSPと別れて屋敷へ戻った。

車が屋敷に入った途端、3人はその大きさに驚かされる。

「すごいわ、園子の家の何倍もの広さがあるわ！」

「一体どんな金持ちが住んでるんだ？」

蘭と小五郎が驚きを隠さずに言いあっている。

コナンも窓からその広大な敷地を見ている。

（こりゃあ並みの富豪なんか目じゃないな・・・うん？）

コナンは庭の一角に、何か大きな黒い影が見えたような気がした。もちろん、それはSPが買い込んだ対空戦車のことだ。

そうこうしているうちに車は屋敷の側に止まる。

扉が開けられると、クラウスが待っていた。

「お待ちしていました。さあどうぞ。」

3人はクラウスについて、屋敷の中へ入っていった。そして再び大いに驚かされることとなった。

「うわあ。」

「すごい。」

「こりゃあ・・・」

屋敷の広さ、大きさ、そして豪華さに感嘆する3人。3人ともこれまで金持ちの屋敷に何回か訪れる機会があつたが、この屋敷はそのどれよりも大きかった。

そして、4人は主のいる部屋ナキの前に到着した。

「では、私が先に入りますので、皆様はしばらくここでお待ちください。」

クラウスが先に部屋の中へ入った。

「一体どんな奴がこの屋敷の主なんだ？」

小五郎が口に出した疑問。そしてそれはすぐに判ることとなった。

凡そ1分後、クラウドが中から出てきた。  
「では、みなさん。中へどうぞ。」  
3人は部屋の中へ入った。

いざ、三千院家へ（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。



## ナギVS小五郎？ 戦いはすでに始まっている。

扉を越え、部屋の中へ入った3人が見た物は、不機嫌な顔をした12、3歳の少女が1人椅子に座っている姿であった。

その光景は3人が想像していた物とは全く違っていた。

「ええと？」

小五郎が何か言おうとするが、なんと言っていていいかわからずそんな声をだす。

「クラウス、これがお前が言った探偵か？」

「はい、お嬢様。」

「ふうん……こんな間抜け面なちよび髭男が本当に名探偵なのか？」

その失礼もへったくれもない言葉に怒りを露わにする小五郎。

「な！！なんだと！！」

その小五郎をなんとかコナンと蘭が宥める。

そして3人はクラウスから衝撃の事実を聞かされる。

「毛利さん、こちらがこの屋敷の主である三千院ナギ様です。」

その言葉に、3人とも開いた口がしばらく閉まらなくなった。

1分後、ようやく小五郎が言った。

「この、小、いやお嬢さんが屋敷の主ですと！？」

小娘といいそうになったのを何とか飲み込み、クラウスに確認する。

「そうです。」

まさかこんな子供がこんな大邸宅の主人であるなど、悪い冗談にしか思えない。しかしクラウスの言っている言葉が嘘とは思えない。「ナギお嬢様は弱冠13歳ではありますが、間違いなくこの屋敷の

主であり、ゆくゆくは数兆とも言われる三千院家の全財産を受継ぐことになるお方です。」

（マジかよ！！）

コナンが心の中で呟いた。

「そんなことどうでもいいではないかクラウス。それよりも何故私の許可なく探偵を雇ったのだ？ダイヤはこの私が守ると言ったではないか！！」

クラウスに怒鳴るナギ。

「しかしお嬢様。万が一ということもあります。それにです。こちらの毛利探偵は確かに間抜け面かもしれませんが、これまでに多くの事件を解決し、さらにはキッドと数々の死闘を交えてきた正真正銘の名探偵ですぞ。」

（事件を解決したのは俺だけだな。）

コナンが心の中で突っ込んだ。

「ったく。わかった。どうせマリアやハヤテもグルなんだろう。そのおっさんがこの屋敷にいるのは許可しよう。ただし私の許可なくして勝手に歩き回らないようにな。」

おおよそ目上の人に使うとは思えないぞんざいな言葉ながらも、ナギは折れた。とりあえずは第一関門突破である。

「それはそうと、その後ろの2人はなんなのだ？」

後ろの2人とはコナンと蘭のことである。

「あちらのお2人は毛利探偵のご家族です。三千院家を見たいと仰ったので、別に断わる理由もございませんので。」

「わかった。ハヤテ！！」

ナギが言うと、ハヤテが室内に入ってきた。

「なんででしょうかお嬢様？」

「この者たちを客室へ連れて行ってやれ。」

「はい、お嬢様。では皆さんこちらへ。」

3人はハヤテに従って部屋を出た。

部屋を出るなり小五郎が早速愚痴を言った。

「つたく、まさかあんな生意気な餓鬼が当主とはな。」

「お父さん！！」

幾らなんでも失礼な物言いに、蘭が叱責した。

「すいません。けどお嬢様を許してあげてください。お嬢様は子供のころから常に命を狙われていました。それに、近づく人も殆どはその財産目当てで、だからお嬢様はあまり人のことを信用しない、いや出来ないんです。そして根っからの負けず嫌いですから、ついあいんな口調になってしまうんです。けど、根はいい子ですから。」

ハヤテがナギの弁護をする。

「へえ、お金持ちも大変なのね。」

蘭がどことなく哀れんで言った。

「えっと、ところであなたは？」

「あ、失礼しました。僕はお嬢様の執事をしている綾崎ハヤテと申します。あ、つきました。こちらです。一応二部屋用意しておきました。お嬢さんとお子さんは左の部屋を、毛利さんは右の部屋を使ってください。御用がおりでしたら、部屋についている電話を使ってください。では。」

そしてハヤテは去っていった。

そんな中、コナンは屋敷に入ってから細心の注意を払っていた。

（もしかしたら怪盗キッドが化けてるかもしれないし、それにどこかに小細工を仕掛けているかも。）

戦いは始まっていた。

ナギVS小五郎？ 戦いはすでに始まっている。（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

次回更新予定は明日または月曜日です。

三千院家は危険が一杯！？

「すごいよコナン君。この部屋だけで家以上の広さがあるわ！！」  
部屋に入るなり蘭がいった言葉。

確かに広い。しかも、内装も一級ホテル並みに豪華である。まさに三千院家の財力を見せ付ける場と言ってよい。

「けど蘭姉ちゃん。変だと思わない？これだけの屋敷なのに全然人がいないよね？」

さすがコナン。この部屋に来るまでにしっかり観察を行っていたらしい。

「そういえば、使いの人とか全然いなかったわね。」

しかし、それならそれでコナンにとっては好都合である。

「蘭姉ちゃん。僕ちよつと探検してくるね。」

「え！？ちよつとコナン君！！」

蘭がそう言うより早く、コナンは部屋を出た。

「よし！！おっと、そうだ。」

コナンは念のため、ボタン型発信機を扉に貼り付けた。そして追跡めがねでその電波が発信されているか確認する。

「ちゃんと作動しているな。」

確認すると、コナンは歩き始めた。

一方、そのころ屋敷外のSPの事務所では。

「屋敷内にて不振な電波の発信を確認！！」

「位置は？」

「客室付近かと。」

「客室！？まさかあの探偵。キッドの変装か？まあいい。すぐに調査に当たれ。」

この数分後、屋敷内に派遣されたSPによって、コナンが仕掛けた発信機が発見され、即撤去された。

そしてこれにより、コナンは危機に陥ることに。

「ヤベー！一体ここはどこだ？」

コナンは屋敷の中で迷った。ほとんど同じづくりだから、いつの間にか自分のいる位置がわからなくなってしまった。

「まあ発信機の電波を辿れば帰れるからいいか。」

というわけで、追跡めがねのアンテナを上げ、部屋の位置を確認しようとする。しかし、レンズには何も反応しない。

「え！？何で??」

正解。すでに撤去されているからです。

「やべー！故障したか?・・・どうするか？」

どうするかしばらく考え込むコナン。そして導き出された結論は？  
「仕方ない、なんとか来た道を辿っていくしかないか？」

うる覚えではあるが、今はそうするしかない。しかし、そこで振り返ると。

「・・・・・・・・」

10mぐらい先に白い虎がいた。

「え!？」

どうしてとコナンが咄然としている間に、その虎はコナンの方に近寄ってきた。

「やばー!!」

すぐにコナンは逃げ出した。しかし。

「追ってきたー!!」

虎は猛スピードでコナンを追ってきた。コナンはとにかく逃げる。だがもともと大人にだって追いつけるのに、今は子供の体であるコナンに虎から逃げれる道理があるはずがない。あっという間に距離が縮まる。

「だ、だめだー!!」

コナンが覚悟したとき。

「イナズマキックー!!」

掛け声とともに何か黒い物体が虎を弾き飛ばした。

「!!!??」

コナンが驚きの目でその光景を見つめた。

「ったく、タマ。お客様にまた迷惑をかけて。」

黒い塊、いや人間だ。その人物は立ち上がって誇りを払いながら吹っ飛んだ虎に向かってそう言った。

「大丈夫ですか？」

コナンに向かって振り返ったその男は、さっきの執事、綾崎ハヤテであった。

三千院家は危険が一杯！？（後書き）

次回更新は月曜日の予定です。

ご意見、感想お待ちしております。



## 小さな名探偵と借金執事

「大丈夫ですか？ええと・・・」

ハヤテが言葉につまる。まだコナンの名を聞いてなく、知らないからだ。

「江戸川コナンです。ハヤテ兄ちゃん、助けてくれてありがとうございます。けどまさかトラがいるなんて。」

立ち上がりながら、子供モード全開でコナンは言った。

「いえいえ。けどコナンなんて、変わってるね。まるでどこかのホームズ馬鹿が付けそうな名前ですね。」

（ホームズ馬鹿で悪かったな！！）

と心で罵るコナン。もちろんこれは彼自身がこの名を考えたからに他ならない。

「けど君どうしてこんな所にいるんですか？確か客室にいたんじゃない？」

「えー！あの、ちょっと屋敷を探検したら迷っちゃって。」

取りあえず、子供がしそうな事実っぽいことを言っておく。まさか、この屋敷を調査していたとは言えまい。

「そうなんですか。じゃあ僕が部屋まで送ってあげますよ。」

「あ、ありがとう。」

こうして、ハヤテがコナンを部屋まで送ることになった。

ハヤテについて歩いていくコナン。そしてその間にも、コナンはさりげなく調査を開始した。

「ねえハヤテ兄ちゃん？」

「なんです？」

「どうしてこの屋敷には全然人がいないの？こんな広いんならもっ

と使用人の人とかがいても良いんじゃない？」

「それはですね、お嬢様が極端に人嫌いだからです。お嬢様は昔から外に出れば遺産目当てで命を狙われていたりしたから。こないだも伊豆で殺し屋に危うく殺されかけたし。そういうわけで知らない人を極端に毛嫌いするんです。だから普通お屋敷内にいるのは僕とクラウスさん、それにマリアさんぐらいです。」

「マリアさん？」

この時点で、コナンはまだマリアを見ていない。

「ああ、そういえばまだお会いしていませんでしたね。この家のハウスメイドさんです。後で多分会えますよ。」

「うふーん……あ、あとどうしてあのナギって人が当主なの？親はいないの？」

すると、ハヤテはちよつと顔を曇らせた。

「お嬢様の御両親はもう何年も前に亡くなっているんだ。お父さんは物心つく前に、お母さんも5歳のときにね。」

「……」

コナンは何か聞いてはいけないようなことを聞いてしまった気がした。そこで話題を変えてみる。

「そういえば、ダイヤって一体どんな風なの？」

「ああ、今回狙われているダイヤについてですか？それは言えませんが。お嬢様に口止めされているものですから。子供といえど話せません。」

ハヤテは話すのを拒否した。

（クソ、子供相手にも言わないなんて。中々口が固いじゃないか。）と、そこでコナンはあることに気づいた。

（そういえば、この人一体何歳なんだ？）

他の事に気を取られていたからあまり気にしていなかったが、そういえばこんな屋敷で働いているにはバカに若いように見える。

「ねえ、そういえばハヤテ兄ちゃんは何歳いくつ？」

「え！？16ですけど。」

さらつと言ったが、コナンは仰天した。

（げー！俺よりも若いじゃん！！なのに働いているのー！！）

まさか年下の人間が働いているなんて。ちなみにコナンの本当の歳は17である。

「えーじゃあ学校は？」

「学校はちゃんとしてますよ。白皇学院。その1年生です。」  
（名門校じゃねえか。）

白皇学院とは、ナギやハヤテの通う、お金持ちの子弟が沢山入っている学校である。そして日本では他に例のない飛び級クラスが特別に認められているのも有名である。

（どうなってるんだ！？この屋敷は？）

来てからあまりに常識はずれなことが多すぎる。

そこで、もっとも情報を聞き出そうとした所。

「ハヤテー！」

ナギの声が廊下に響いた。

## 小さな名探偵と借金執事（後書き）

意見・御感想お待ちしています。

次回更新は木曜日、または水曜日です。

ナギナギランドへ行こうよ！！

「おーい！ハヤテ！」

やってきたのは屋敷の主、三千院ナギであつた。

「何でしょうかお嬢様？」

「うん、あの……ってそのメガネの生意気そうな坊主が何故ここにいるのだ？」

（生意気そうな坊主で悪かったな！）

コナンが悪態をつく。もちろん心の中でだ。

「どうやら迷子になってしまったようで。今から僕が客室まで送るところです。あ、ちなみにお名前は江戸川コナン君というそうです。」

「そうか。……おい、お前！」

ナギが視線をコナンの方に向けた。

「え、はい？」

「今暇か？」

これは予想外の質問である。

「え！？別に用事は特にないけど。」

とりあえずそう答えた。

「よし、だったらお前もついてこい。」

「えー！」

訳がわからないといった表情で答えるコナン。

「あのお嬢様、話の要領が得ないんですが？」

ハヤテが助け舟を出した。

「あ、すまん。実はな、ナギナギランドを一般にも開放することはハヤテも知っているな？」

ナギナギランドとは、三千院家敷地内にあるナギ専用の遊園地である。もちろん、一般の人間は使えない。しかし、先日いとこの愛沢咲夜から、彼女の遊園地は一般人にも開放していると聞かされ、

自分も負けじとというナギの気まぐれというか、負けず嫌いな気持ちによって、一般に開放することが決まったのだ。

そしてそのことはハヤテにも知らされていた。

「はい。けどナギナギランドはそれで今は改装中では？」

ハヤテの記憶によれば、一般人が入れるように改装工事に入っただけである。

「実はその工事が数日前に終わってな、来て欲しいという連絡を受けていたのだ。どうせ怪盗キッドの予告時間までまだ時間もあるし、そこで、この坊主に……」

「コナンです。」

坊主呼ばわりされるのも嫌なので、コナンが訂正した。

「……コナンにモニターになってもらいたいのだ。なんならあのもう1人の女も誘って良いぞ。」

「はあ……コナン君はよろしいですか？」

「え！？まあ暇なんで良いですけど。」

ナギナギランドという物の意味もわからないまま、コナンは場の雰囲気には推され、承諾してしまった。

「よし決まりだな。というわけでハヤテ、30分後に屋敷を出るぞ。あの女を呼んでこい、ついでに外へ行く格好に着替えて来い。」

「わかりましたお嬢様。」

そして任務を実行すべく、ハヤテは廊下を歩いていった。

その場にはナギと、訳もわからぬまま承諾してしまったコナンの2人が残された。

「ええと、ナギお姉ちゃん？」

「うん！なんだコナン？」

「ナギナギランドって？」

わからないので一応聞いてみる。

「行けばわかる。」

ナギはそう答えるだけであつた。

40分後ナギナギランド

4人はナギナギランドの中央広場にいた。

「すごいですね、屋敷の中に遊園地があるなんて!」

蘭が感嘆の声をあげる。

「別に凄くないぞ、咲夜や伊澄も持っている。」

さらっと言うナギ。

「咲夜に伊澄?」

また新しい単語に興味を示すコナン。

「お嬢様のお友達です。」

ナギに変わってハヤテが答えた。

(プレステ感覚で遊園地を持つなんてどういう神経してるんだあんたら?)

コナンが心の中で突っ込む。ちなみに、偶然かはわからないがハヤテも最初来たとき同じことを言っている。

「けどどついう風に回ったらいいかしら?」

蘭が言う。

屋敷にあるとはいえ、さすが遊園地、広い!!だからどこから回れば良いのか迷う。

「それだったらもうすぐ案内係が来ますよ。」

ハヤテが気を利かせて言った。

「え!」

その答えは一分後に出ることとなる。

ナギナギランドへ行こうよ!! (後書き)

連載開始2週間にして1000人を突破しました。読者の皆さんには本当に感謝します。

今後もより良い作品を作るため、御意見御感想お待ちしております。



## ナギナギランドへようこそ

「おお、森の妖精たち、本格開業前にお客さんだぞ!!」

突然後ろから声がかけられる。

コナンが慌てて振り向くと、この手の遊園地には必須アイテムともいえる、着ぐるみキャラたちが立って並んでいた。

「ええと、これは？」

「うん？まあこういう遊園地だから、独自のキャラクターぐらい居るぞ。ちなみに今話題の中国の 景山遊園地とは違って完全オリジナルだぞ。」

コナンの問いにナギが答えた。

「ようこそ、僕はここナギナギランドの森の妖精、ケレ・ナグーレちゃんだにゅ!!」

一番前のうさぎのキャラクターが喋る

（いや、その名前ってまずくない!!特に子供に・・・）

心の中で叫ぶコナン。

「ところでナギお嬢様、そちらの借金執事君はともかく、そのお二人はどちらさまですか？」

「ああ、今回我が家に来ている探偵の家族、毛利蘭と、江戸川コナンだ。」

（呼び捨てかい!!）

心の中で悪態をつくコナン。

「そうですか。本当に来てくれてありがとう・・・いやありがとうだにゅ。」

（なんか本音が聞こえたぞ!!）

「けど中の人も大変ですね。」

蘭が気遣って言った。

しかし、ケレ・ナグーレは蘭の肩に手をつけて言った。

「中の人なんていない！……いや、いないんだにゅ！」

「え！？けど着ぐるみ……」

「僕達はナギナギランドの妖精だにゅ！！」

蘭はこの時、ケレ・ナグーレの後ろに黒い影を見た。

（これ以上突っ込むのはやめておこう……）

蘭がビビッた。

「しかし相変わらずナギお嬢様は小さいけど、そちらのお嬢さんは乗り物に乗れるね。」

「え？」

蘭は辺りを見回してみる。

周りの乗り物は殆ど140cm以下の方はお乗りになれないという看板が目立つ。なるほど、彼女から見たナギは140cmに身長が届くか届いてないかにしか見えない。

実際ナギの身長は138cmだ。

と、そこでハヤテが話しに割り込んだ。

「ちよつと待ってください。今度こそ整備大丈夫でしょうね？こないだみたいに脱線して外に放り出されるみたいなことにならないで下さいよ。」

「「ええ……！！」」

さすがにこれにはコナンと蘭が声を荒げて言った。というか命に関わる問題だ。そんな事になったら冗談やギャグでは済まされない。「ははは……大丈夫。こないだ国土 通省の査察受けてOKもらったから。」

「だったらいいですけど。」

「というわけで、ハヤテ君と蘭さんの2人でお乗りになつては？」

「「何……！！」」

その言葉に敏感に反応したのはナギとコナンだ。2人に怒りのオラが現れる。

「ダメ！！絶対ダメ！！」

「！！！？？」

2人の剣幕にその場の全員が引いた。

「な、なら4人で楽しめるアトラクションをどうぞ。」

ケレ・ナグーレの提案により、4人はファミリー向けのアトラクションを楽しむこととなった。コーヒーカップやゴーカート。

そして・・・

「きゃあああ！！！！」

蘭が悲鳴を上げる。

## ナギナギランドへようこそ（後書き）

御意見ご感想お待ちしています。

またオリジナルハヤテファンフィクションの想いの行方も宜しく  
願います。

## ナギの嫉妬とメイドさん

「キヤアア!!」

蘭の悲鳴が響く。

そこは暗く、そして所狭しとお化けや妖怪が出てくる空間。

そう、ここはお化け屋敷。

「蘭姉ちゃん。そんなに怖がるなら別に入る必要なんてないんじゃない？」

「そこが楽しいのよコナン君。」

コナンの疑問にさらつと答える蘭。

（つたく、女つてのは分からねえな。あっちも。）

そうしてコナンが視線を移した先には、ハヤテに泣きながらしがみつくナギの姿があった。

「お嬢様。無理せず外で待っていたほうが良かったのでは？」

ハヤテが気遣って言うが、負けず嫌いなナギがそんな言葉をすんなりと受け入れる筈がない。

「別に無理などしていい!!」

この一点張りである。

ナギは小さいころに体験したある出来事により、暗い所が苦手な体質になってしまった。それは13歳の今となってもそのままで、彼女の大きな弱点である。なにせ、夜1人で寝ることさえ出来ないのだ。だから、お化け屋敷のように暗いところへ入ることは滅多にない。その彼女がどうして付いてきたのかハヤテにはよく理解できない。

（お嬢様はなんで今回は一緒についてきたんだろう？）

一方のナギの心境はというと。

（暗いところに入るのはいやだが、あの蘭という女とハヤテを一緒にしておくのは危険だ。）

というような物であった。

ナギは極端にハヤテが異性と付き合うことを警戒している。

これは彼女が、自分こそハヤテの恋人だという自負を持っているからに他ならない。しかし、ハヤテにはそのような考えはない。

これは2人が持つている誤解が原因である。

ハヤテは屋敷に入る前、両親の借金を背負ったことにより自暴自棄となり、誘拐をしようとした。幸いこれは警察沙汰になる前に未遂で終わったが、その時の標的がナギであった。そして彼は彼女を誘拐しようとしてこう言った。

「君が欲しいんだ。」

しかし、ナギはこれを告白と受け取った。

というわけでこのような状況になったわけである。ちなみに、真実を知っているのはメイドのマリア1人だけである。

話が脱線したが、そういうわけでナギはお化け屋敷についてきた。そして幸いといつか4人は何事もなく外に出た。

「もう時間ありませんし、最後に観覧車にでも乗りましょうか。」  
既に時刻は3時を回っている。

ハヤテの提案によつて、4人は観覧車に乗った。

頂上まで上がると、三千院家の敷地がそれなりにわかる。

「へええ、本当に広いお屋敷ですね。あ、あれ湖ですよね？」

蘭が指差して言った。

「ああ、三千院湖だ。まあ直径2km程と小さいがな。」

（え！小さいの？）

一般人の常識は通用しない。ちなみに湖とは三千院湖のことだ。

一方のコナンは、これ幸いとばかりに、三千院家の地理の把握に勤めていた。

（屋敷があそこで、それに・・・）

そんな中ハヤテは、あることを思い出した。

「お嬢様、そういえば三千院湖にはマリアさんがいるはずですよ。ついでに迎えにいきましょうか？」

「おおそうだな、この者たちのことも紹介しておきたいし。」

4人は観覧車から降りると、ナギナギランドを出て今度は三千院湖に向かった。

数分後三千院湖

「ええと、マリアさん？」

4人をそこで待っていたのは。

「あらハヤテ君。」

サングラスをかけ、片手で缶コーヒーを飲みながら立っているメイドさん。その後ろでは、3mはあろうかというヘラブナがピチピチと跳ねながらクレーンに釣り下がった状態でぶら下がっていた。

その光景を4人は啞然として見ていた。

ナギの嫉妬とメイドさん（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



## 新たな少女

「マリアさん。またそれを釣り上げたんですか？」

ハヤテがうんざりといった表情で言った。

「ええ、夕食用の釣りも終わりましたし、ちょっと暇つぶしに。」

明るい笑顔でそう言うマリアを、コナンと蘭はただ呆然と見ているしかなかった。

（この屋敷の中では常識は通用しない。）

2人してそんなことを考えていた。

「ところでハヤテ君、そちらのお二人は今日来られたお客様ですよ？」

「ええ、クラウドさんが依頼した探偵の毛利さんのご家族の蘭さんとコナン君です。」

ハヤテが2人を紹介した。

「毛利蘭です。」

「江戸川コナンです。」

「マリアです。けどお客様が来たからには夕食は腕を振るわないといけませんね。」

マリアが満面の笑みを二人に向けた。その表情に、少しばかりコナンの頬は赤くなる。

（綺麗な人だな……。って俺は何考えてんだ！！）

「どうしたのコナン君？」

そんな事もあったが、こうして5人は屋敷へ戻る。

そのころ、キッドこと快斗はいざ三千院家に乗り込むべく、出発の準備を寺井老人と共に

に進めていた。

「グライダーよし、トランプ銃も持った。変装道具もよしと。」  
いつもどおりの小道具を揃える。

そんな中、見守る寺井は不安で一杯だった。

「坊ちゃん、今回はやめた方が良いでしょう。情報も殆どないのに・・・それに嫌な予感がするんです。」

寺井が快斗のことを心配するのは今に始まったことではない。いつものことだ。しかし、彼自身今回はいつも増して不安だった。

しかし、快斗の方はそんな心配も何処吹く風であった。

「もう、爺ちゃん。おれはもう子供じゃないんだぜ。確かに情報はないけど、予告状を送

った以上もう引き下がれねえんだよ。大丈夫だって、盗みには失敗しても、絶対に捕まるようなヘマはしねえよ。」

いつもどおりのポーカーフェイスで言う快斗。

しかし、実を言うと彼自身今回は不安が大きかった。先ほどの失敗を前提にしているような言葉からもわかる。

「じゃあ行ってくる。」

「おきをつけて。」

こうして快斗は三千院家に向かって、颯爽と飛んでいった。

#### 同時刻三千院家

一方三千院家では、ハヤテ・コナンらが屋敷に戻ると、客間で新たな客人たちが彼等を

出迎えた。

「何だ、咲夜に伊澄ではないか。」

そこにいたのは、ナギの従兄弟である愛沢咲夜と親友の鷺ノ宮伊澄のであった。

「おおナギ、お邪魔してるで。」

「急に押しかけてすいませんナギ、それにハヤテさま。」

「一体どうしたというのだ？」

今日二人が来るということは、ナギは聞いた覚えがなかった。それはハヤテも同じであった。

「ナギ、怪盗キッドから予告状が来たというのはほんまか？」

咲夜が聞いてきた。

「あ、ああ。なんだ知ってたのか？」

「愛沢家の情報網を舐めてもらったらあかんで。実はなナギ、その怪盗キッドをうちは捕

まえたいんや。」

「ほう。何か盗まれたのか？」

「実はな、今年の夏キッドが大阪で大停電を起こしたんや。その時家の会社もとばっちり喰らったんや。」

コナンはその話を聞いて、夏の大阪での事件を思い出した。（詳しくは映画世紀末の魔術師を御覧下さい。）

「だからその敵討ちをうちはしたいんや。」

「だからって伊澄まで巻き込んで家に乗り込んでくるな!!」

ナギが声を荒げた。

ナギはどちらかというとこの関西少女が苦手であった。嫌いというわけではないが、そのテンションに時々付いていけなくなる。

「まあまあお嬢様、折角来て頂いたんですし、そこまで邪険にしな

くても。」

「おお、さすがに借金執事は話しがわかるさかいな。」

と、この会話でコナンはある言葉が引っかった。

（借金？）

一体何のことであろうか？

「ところでナギ、そちらの男の子はどちらさまですか？」

伊澄がコナンのことを聞いてきた。

「ああ、クラウスが依頼した探偵の家族でコナンだ。もう1人蘭という女がいるが、そっ

ちは今マリアと一緒に厨房にいる。」

「探偵・・・ああ、あのクラウスの爺さんと一緒に飲みつぶれた親爺かいな？」

（おっちゃん！！！！！！）

心の中で絶叫するコナン。どうやらクラウスと一緒に酒を飲んでいたらしい。そして

例のごとく飲みつぶれたらしい。

こうして、クラウスと小五郎は戦わずして脱落した。

## 新たな少女（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。ならびにもう一つのハヤテのごとくファンフィクション「想いの行方」もよろしくお願いします。

## マリアと蘭

コナンが咲夜や伊澄と会っているところ、厨房ではマリアと蘭が夕食作りに勤しんでいた。

そして、若い二人の女性のペアであるから会話も弾む。

「へえ、マリアさんってまだ17歳なんですか。」

会話が歳の事に及んだ。その途端マリアの表情が陰しくなった。  
「そ、そうですね何か？」

「いや、外見の割りに若いなって。マリアさんってぱっとみ淒く落ち着いてて、もう大人みたいだったから。」

蘭が笑顔で言うが、マリアの心中は穏やかではない。

実はこのての話題はマリアにとってコンプレックスとなっていた。だから、普段からハヤテたちは気をつかっているのだが、もちろんそんなことを蘭が知る由はない。

マリアは会話の内容を変えようとした。しかし、蘭が話した言葉は意外な内容であった。

「いいな。」

「え!？」

どうしてとマリアは思った。

「だって、大人の魅力に溢れているなんて、羨ましいですよ。」

今までこんな好意的な言葉は聞いたことがない。

「そ、そうですねか？」

「そうですね。マリアさんは男の子にもてるんじゃないですか？」  
蘭が何気なく言ったが、これもまたマリアがコンプレックスとしている内容だった。

「いいえ。何せずとお屋敷の中にいるものですから。恋愛なんてしたことありません。」

そう、マリアには恋愛の経験はない。以前それをハヤテに灰色の青春とまで言われている。

しかし、蘭が次に言ったのはまたも意外な言葉であった。

「え、けどハヤテ君とはどうなんです？お似合いだと思うけど。」  
この言葉に、マリアの鼓動は早くなる。

「え、何を言うんですか、ハヤテ君とはただ一緒に働いているだけですわ。」

しかし、よくよく考えてみると、確かにハヤテとは浅からぬ縁で結ばれている。しかも、それなりに魅力も感じている。だが、そこまで考えて、マリアはあることに気づいた。

「確かにハヤテ君は魅力的に思えますけど………けど私は彼のことを好きになつてはいけないのです。」

「え？」

一体それはどういうことだろう。だが、何か聞いていけないようなことであるのを、蘭

は無意識に感じた。厨房を重々しい沈黙が包む。

その静寂を破ったのは、客間のナギからの連絡であった。

「おおい、夕食はまだかマリア？」

二人はここでハッとした。

「とにかく夕食を作り上げませんか、蘭さん。」

「そ、そうですね。」

恋愛事情は複雑怪奇。

30分後

ハヤテ・コナン達はマリア・蘭合作の夕食に舌鼓していた。

「おいしいですね。蘭さんは中々料理が上手なようですね。」  
ハヤテが蘭の料理を誉める。

「ありがとうございます。」

ハヤテに誉められて、蘭は満面の笑顔を向ける。  
それに対し、コナンはハヤテに殺意を覚えた。

（蘭の奴、年下相手にデレデレしやがって。）

一方、ナギも同じような心境だった。

（ハヤテの奴、あんな女の方にはっか目を向けて。）

二人してそんなことを考えていた。

もっとも、二人ともそれを心の中に押しとどめるぐらいの器量は心得ていた。それに、

そういうことを考えすぎるとせつかくの料理が不味くなる。

そして、確かに蘭の料理は美味かった。

「ほんまに、蘭さん料理上手いやん。」

「ええ、とてもおいしいです。」

咲夜と伊澄がハヤテの意見に同調した。

和やかな（？）時間が流れていく。しかし、怪盗キッドとの対決の時は刻一刻と迫っていた。



## マリアと蘭（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。また、ハヤテのごとくファン  
フィクション、想いの行方もよろしく願います。

## 逃避行

「コナン君こっちだ。」

ハヤテがコナンを呼ぶ。二人は逃げていた。その後をナギたちが追う。

「こらあハヤテ！待つのだ！おとなしくこの服を着るのだ。」  
その手に、ヒラヒラの女物の服を持ちながら。

ことの発端は夕食の終わりに発生した。

「なあナギ、そういえばこんな写真があるんやけど。」

咲夜がそう言って写真をナギに手渡した。

「ほう、どんな写真だ？」

そうして写真を受け取る。

「こ、これは！！」

ナギの言葉に、ハヤテも覗き込んだ。そして驚いた。なんとそれはハヤテがメイド喫茶でメイドさんをしている時の写真だった。

「なんでこれが咲夜さんの手に！？」

「さっきも言っただけど、愛沢家の情報網を舐めてもらったらあかんで。」

どうやら隠し撮りされていたようだ。

ハヤテにとっては迷惑極まりない。

しかしことはそれで済まされなかった。ナギが言った次の言葉に、ハヤテの心臓は凍りついた。

「うーん。やっぱりハヤテは女物が似合うな……………」

最後の言葉は小さい声だったが、ハヤテは直ぐに気づいた。

（ヤバ！）

以前にもこんなことがあった。案の定ナギが言った。

「ハヤテ、また女装してくれないか？」

（ほら来た！）

ナギの悪い思い付きである。しかもとびっきりの。

彼にとつては迷惑千番、貞操の危機である。

（だれか助けて！！）

と心の中で思うが、ことの元凶の咲夜は。

「お、面白そうやな！！」

と、一発で賛成。経験者のマリアも賛成した。こうなると、味方になりそうなのは伊澄1人。だが、その彼女も。

「私も・・・ちよつと見てみたいです。」

と言った。さらに客人の蘭も。

「だったらスカートは・・・」

と女子高生モードバリバリすでにハヤテの女装計画を練り始めていた。

（ううう！！！！）

最後にコナンのほうを見たが、そのコナンは知らん振りを決め込んでいた。

そのコナン自身は。

（ふん。いい気味だ。）

と思っていた。

コナンの嫉妬恐るべし。

しかし、火の粉はいつ降りかかってくるかわからない。

蘭がこう言ったとき、コナンの心臓は凍りついた。

「あ、だったらコナン君にもかわいい格好させちゃいます？コナン君もにあいそうですし。」

（何ですと！！??）

蘭はこれまでに何度かコナンに変な格好をさせようとしている。その癖が出たようだ。

「お、それもおもしろそうだな。」

ナギたちも万場一致で賛成した。

「というわけで二人とも男らしく着るのだ。」  
というわけで冒頭の場面に戻る。

「待て！！」

二人はとにかく全力疾走した。さすがにこんな時には反目してられない。コナンはハヤテと共同して逃げ切ろうとする。

しかし、相手のほうが数が多い。

「逃がさへんで！！関西人なめたらあかんで！！」

いつのまにか咲夜と伊澄が前に回りこんでいた

「くそ、せめて伊澄さんひとりだけならなんとかなるのに。」

と、そこでコナンは飛び道具を使う事にした。こういうときに使うのはおかしいかもしれないが、それほど切羽詰っていたのだ。

使おうとしたのは今回、博士があらたに開発した3連発麻酔銃である。

コナンはハヤテにばれない様に照準器を上げ、二人に狙いをつけた。そして、麻酔銃を発射した。

2発とも見事に咲夜と伊澄の額に命中し、その場に二人は倒れた。

「よし！！」

その隙に二人は何とか脱出に成功した。

しかし、コナンは気づいていなかった。照準器をハヤテに見られていたのを。

## 逃避行（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。それとハヤテのごとくオリジナルファンフィクション、想いの行方もぜひ読んでみてください。

キッド侵入！！

「レーダーに感あり。」

ハヤテとコナンたちがどたばたしていたところ、SPの詰め所は慌ただしくなっていた。

「方位は屋敷への進入コース。スピードは対地速度約60km。エンジン音は一切感知できませんからグライダーか何かと思われます。高度は約100m。」

屋敷の周囲に設置された対空レーダーに未確認飛行物体が捉えられた。

「進入までは？」

「凡そ2分。」

SPの隊長（独自の設定です）は直ぐに屋敷内へ配備した対空砲や対空戦車に指示を出す。

「全砲撃ち方用意、使用弾種三式対空榴散弾。信管は超低高度爆発の物を使用せよ。」

殺す気満々である。

「進入まで凡そ1分。」

「全周波数帯で警告を促せ。」

「了解。飛行中のグライダーに告ぐ。それより先は三千院家の敷地を侵犯する。直ちに進路を変更せよ。」

全周波数帯で発信しているから、無線機を持っていれば絶対に聞こえているはずである。

だが、相手は全く動きを変えない。

「目標。進路、速度変わらず。侵入まで20秒。」

「全砲目標が敷地内侵犯をしたら即射撃開始。」

そして20秒後。

ファンファン！！

警報音が鳴る。

「進入しました!!」

「撃て!!」

その途端、配置されていた対空戦車の35mm砲と、20mm対空機銃、そしてSPの持つ自動小銃の一斉射撃が始まった。

快斗は一直線で三千院家目掛け飛んでいた。

そして、目標を捉えた。

「でけえ!!」

彼の率直な最初の三千院家に対する感想である。まあ確かに三千院家はでかい。なにせ湖まであるのだから。

だが、敷地までもう少しと言うところで無線に声が入った。

「飛行中のグライダーに告ぐ。それより先は三千院家の敷地を侵犯する。直ちに進路を変更せよ。」

彼が使っていたのは警察無線の傍受用無線機だったから、つまり警察の周波数で言ってきたことになる。それに驚きながらも、はいそうですかと引き下がる快斗ではない。無視して飛び続けた。

しかし、三千院家の敷地に入り、着陸場所を探そうと思った直後、まるで活火山の噴火のように、地面が光った。

「何だ!？」

と、次の瞬間には周り中で一斉に砲弾が炸裂するか、飛んできた。「うわ!!」

こんな手荒い歓迎など受けたことがない。まああつたらそれはそれで恐ろしいが。

とにかく、快斗が命に危機に瀕したのは確かだ。なにせ35mm砲というのは薬莢が500mのペットボトルぐらいある拳銃とは段違いに強力な銃だ。しかも、今回使われているのは榴散弾。これは内部にリンで出来た子爆弾が内蔵されていて、それによって相手を焼き尽くす砲弾だ。

快斗は懸命によけようとしたが、ついに一発がグライダーに燃え

移った。

「ヤベー!!」

翼が焼かれたことで、グライダーは揚力を失ってしまい、錐揉みしながら落ちていった。

その様子をSPたちも見ていた。

「やりました。撃墜です。レーダーからも反応が消えました。」

「生死はわかるか？」

「そこまでは。」

「だったら警備ロボの生命センサーの感度を全開にまで上げる。どんな些細な反応も見逃すな。SPの名に懸けて、絶対にキッドが屋敷内に入るのだけは防ぐんだ。」

「了解。」

そのキッドは無事だった。なんとか不時着に成功していた。

「危なかったぜ。けどなんであんな武器持つてるんだ。」

あやうく死ぬところであつた。もつとも、三千院家の非常識なところはここだけではない。しかしそれを彼が知る由もない。

「とにかく、敷地内には進入できたぜ!!」

快斗は立ち上がると屋敷のほうへ向けて歩き始めた。

こうして怪盗キッドこと快斗は進入を果たした。しかしその前途は多難だった。



キッド侵入！！（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。それからもうひとつのファンフィクション、想いの行方もよかったら読んでください。

## 遭遇

「クソ!!」

快斗は全速力で逃げていた。なぜなら。

「侵入者を排除せよ!!」

命の危機に瀕していたからだ。

「しつこいぞいつら!!」

警備ロボット三台が快斗を追いかけている。

快斗は木の陰に隠れたり、トランプ銃の煙幕を使ったりしてまこ  
うと試みたが、その抵

抗は尽く意味をなさなかった。さすがに改良されているだけある。

ロボットはサーモグラ

フィーを使っていたのだ。それをかわそうと思ったらフレアが必要  
である。

「このままじゃ殺される。」

警備ロボットは容赦なく、装備された機関銃とミサイルで攻撃し

てくる。今はなんとか

かわせているが、体力を消耗しつつある。それをかわしきれなくな  
るのも時間の問題であ  
る。

「さあどうしたもんだ。」

頭をフル回転させ、何か妙案を出そうとする。

と、そこで視界が開け、目の前に湖が現れた。その途端、快斗に  
ある考えが浮んだ。

「一か八かだ!!」

快斗はそのまま湖に飛び込んだ。そして沖へ向かって泳ぎ始めた。  
すると、さすがに警備ロボットも追跡を中止した。三千院湖に不  
審者が飛び込むなど予

想外だったからだ。

「やったぜ。」

撤退していく警備口ボを見ながら、快斗に安堵の息が漏れる。

しかし、良いことばかりではない。身を軽くするため、殆どの道具を捨ててしまった。

辛うじてトランプ銃は守りきったが、上着も帽子も、メガネも落としてしまった。さらに、

再び岸まで泳がなければならぬ。

「爺ちゃんの予感が大見事で当たっちゃったぜ。」

そんな愚痴をこぼしながら、再び彼は泳ごうとした。しかし、同時に何かの気配を感じ

た。慌てて振り返ると、何かの鰭が見えた。

水にもぐって確認してみると、10m大の魚である。それが口を大きくあけて快斗目掛け一直線に向かってくる。

「喰われる!!」

直感的にそう感じ、彼は全速力で泳ぎ始めた。

しかし、ここは水の中。人間と魚では魚の方に分がある。どんどん距離が縮まっていく。

「う、うわああ!!」

もうだめだと思った瞬間。幸運にも魚が追えないぐらいまで浅い所に逃げ込めた。魚はあきらめて沖に戻っていった。

「た、助かった。」

快斗はなんとか岸まで泳ぎ着いた。しかし、もうズタズタのボロボロである。とても動ける体力など残ってなく、彼は力なくその場に倒れこんだ。

そのころ、ナギや蘭たちの追跡を巻くため、ハヤテとコナンは一旦屋敷の外に出ていた。

ちなみに、二人には認識用のカードが渡されているから警備ロボに追われる心配はない。

「とりあえず、ほとぼりが冷めるまで庭でも回ろう。」

ハヤテがそう提案し、二人は庭を散歩していた。

そして二人はいつのまにか三千院湖まで来ていた。

と、そこでコナンは、湖の岸边に何やら不審な影を見つけた。

「何だろう？」

時計のライトをつけ近寄る。ハヤテも持っていた懐中電灯をつけて近寄ってみる。

そして、照らしてみてもその正体がわかった。

「人だ！」「」

ハヤテがすぐに声を掛けてみる。

「大丈夫ですか？って若い！！」

自分とほぼ同じ歳程度の少年が倒れていたことに驚くハヤテ。

一方、コナンは別のことに驚いていた。

「ハヤテ兄ちゃん。こいつ怪盗キッドだよ。」

「え！？」

コナンが、トランプ銃を見せながら言った。

## 遭遇（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。それとくだいようですが、ハヤテのごとくオリジナルファンフィクションの想いの行方もよろしくお願いします。

## 尋問

とりあえず、二人はキッドをハヤテの部屋に運ぶ事にした。

ハヤテが担ぎ、コナンはあたりに注意する。

幸い、SPにも警備ロボにも、そしてナギや蘭たちに接触することなく、二人はハヤテの部屋に無事たどり着き、キッドを取り敢えずベッドに寝かせた。

「取り敢えずここに連れてきたけど、これからどうしようか？」

ハヤテとしては、犯罪者を捕まえてからの扱い方など知らない。

「やっぱり警察に引き渡した方が良いのかな？」

実に真面目な意見である。

しかし、コナンはその意見に真っ向から反対した。

「いや、取り敢えず目が覚めるのを待とう。」

コナンとしては個人的にキッドと話をしてみたいと思っていた。今はその絶好の機会である。

一方、ハヤテもコナンの不審な行動を問い詰めてみたかったし、また確かにキッドと話をするのも面白そうであった。すでにコナンが彼を調べて特に何も持っていなかったと判ったから、逃げられる心配もないだろう。

「わかりました。そうしましょう。取り敢えず何か温かい物でも。それに着替えも必要ですね。」

この後、ハヤテがコーヒーや着替えなどを準備した。そして凡そ20分後、ようやくキッドは目覚めた。

「こ、ここは？」

「僕の部屋です、怪盗キッドさん。」

ハヤテの言葉に仰天する快斗。

「な、何だつて？じゃあ俺は捕まったのか？」

「いいえ、別に縄で縛ったりなんかしていません。あくまであなたが倒れていたので保護したまでです。コーヒーをどうぞ。」

と、ハヤテがコーヒーを差し出す。

普段は用心深い快斗も、ハヤテの営業スマイルに特に畏の様な物は感じられず、そのままいただいた。

「い、いただきます。」

「いや、しかし。コナン君が見つけてなかったら、あなた死んでいたかも知れませんよ。感謝するんですね。」

「えー?」

そこで快斗はコナンがいるのに気づいた。

「そうか、探偵君が助けてくれたのか、礼を言わなくちゃな。」

キッドとしては、いつも会った時のように礼を言っただけで特に悪気はなかったのだが、コナンは彼の言葉に慌てた。

「おい!!」

そして、案の定ハヤテが反応した。

「そういえば、コナン君。君さつき変な照準器付きの時計で伊澄さんたちを倒しましたよね。他にも三千院湖でも小学生にはない注力力で彼を発見した。そして名立たる怪盗キッドさんが探偵と呼ぶ。君小学生にしては不自然な点が多いですよ? 一体何者です?」

コナンはなんとか落ち着いて考えようとした。  
(大丈夫だ。黙り込んでシラを切り通せば。)

だが。

「そりゃあそうだよ。だってこいつの正体は高校生探偵の工藤新一だもん。」

快斗があっさり言ってしまった。

「うわああああ!!!」

快斗も意外と口が軽い。まあ普段ならこういうことはないだろうが、常識はずれの目にあってちょっと緊張感に欠けてしまったのかもしれない。

「え!!! 工藤新一って、あの有名な!? ちょ、ちょっとどういこうとです!」

さすがにハヤテのリアクションを見て、快斗も不味い事をしたと

気づいた。

（しまった。つい口が滑った。なんとかごまかさなきゃ。）

「ええと、それはだな・・・あのなんと言ってよいか。」

しかしパツと言いつけが思い浮かばない。

「どうなんですか？」

「いや、その色々と事情があつてね。いや部外者のあなたにこれ以上言うのは。」

これでは時間稼ぎにしかない。

「事情？一体何なんです？事情つて？お二人とも何を隠しているんですか？」

問い詰めるハヤテ。

そんな中、コナンとキッドは。

（どうする。）

（やべ。）

そして、さらに悪いことが重なった。

「その事情、私たちにも話してくれないか。」

「・・・な！」「・・・」

3人が振り向くと、部屋の入り口にナギ以下女性陣が勢揃いしていた。



## 尋問（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

それと3000人突破ありがとうございます。

ただこれより先、作者大学のテスト突入のため更新が滞る可能性  
があります。ご了承ください。

そして、想いの行方もよろしくお願いします。

## 蘭vsコナン

「お、お嬢様!!」

部屋の入り口に立っていたのは、ナギとマリア、そして。

「コナン君。一体どういうことかしら?」

笑顔だが、目が笑っていない蘭の3人だった。

「ええと、蘭姉ちゃん。まさか今の話・・・」

「全部聞かせてもらったわよ。」

コナンにとっては最悪の事態。

「取り敢えず、客間に移動しましょうか皆さん。もちろん怪盗キッドさんも。」

このマリアの提案によって全員客間に移動。

ちなみに、伊澄と咲夜がいないのはまだ麻酔から覚めていないからだ。

この移動する間に充分隙をみて逃げれたはずなのだが、結局コナンも快斗も言い訳を考える方に集中してしまい、唯一の好機を逃してしまう。おまけに、二人とも最後まで言い訳が思いつくことはなかった。

「で、まずハヤテ。どうしてお前の部屋に怪盗キッドがいたのだ?」  
まず最初に問われたのはハヤテ。

「はあ、それは・・・」

ハヤテはありのままを話した。別に彼にはやましいことなど微塵もないのだから。

「わかった。怪盗キッドを連れ込んだことに問題はないな。まあ逃げた罰として後で女装してもらうがな。」

「ええ!!」

結局逃げたことに対してペナルティが加えられることとなった。  
次に問い詰められたのはコナンである。もちろん問い詰めるのは  
蘭だ。

「コナン君。さっきのことは本当かな？あなたが新一って!？」  
もちろん、コナンとて事情という物がある。しかし、先にも書いた  
が言い訳は思い浮かんでいない。というわけで。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙りこくった。

「沈黙が答えというわけね・・・・・・・・・・だったら、怪盗キッド、あ  
なたが言ったことは嘘なの？」

「えー!!」

いきなりお鉢が回されてきた快斗。彼もどうしたものか困った。

「・・・・・・・・・・」

結局かれも沈黙。

「ところで、その新一君と言うのは？」

沈黙を破って質問したのはマリアだ。

「ああ、新一って言うのは私の幼馴染の・・・・・・・・・・」

彼女に工藤新一について説明する。

「ええ!!ちょっと待ってください。それだったら歳がぁいません  
よ。」

マリアが常識的な事をつっ込んだ。

しかし、蘭はこれまでに幾度かコナンに疑念を持ったことを話し  
た。

「けどですね、顔が似ているしそれに今まで・・・・・・・・」

加えて、ハヤテが先ほどコナンに聞いたことを言ったため、その  
信憑性を高めた。

「そういえば、さっき・・・・・・・・」

蘭に先ほどコナンに言ったのと同じことを話すハヤテ。

しかし、やはり一度そういう逃げる糸口となる話題（歳の差）が  
出ると、コナンは勢いづいた。

「と、とにかく僕は新一兄ちゃんじゃないよ！！だって大人が子供になるなんてありえないでしょ。」

子供モードバリバリで反論する。

「けど、例えば薬でそうなったとか。」

蘭もあきらめない。

「そんな薬あるわけじゃないじゃん。」

コナンも逃げる。このままでは埒があかない。このままでは明後日になってしまう。

そこへ、気の利く提案をしたのがナギであった。

「そんなに言うなら、そいつとその新一とか言う男のDNAを調べれば良いじゃん。なんなら家の病院の機械使っても良いぞ。」

「えー！！」

この時、コナンはもうだめと確信した。なぜなら照合すれば100%合致するからだ。もちろん、照合には新一の髪の毛とか必要だが、そんな物は家に置きっぱなしのブラシとか探せば絶対に出してしまう。もう逃げ切れない。。

蘭が勝ち誇った顔をした。

「だったらコナン君。好意に甘えてDNA鑑定しましょうか。いいわよね、あなたが正しいければ合致しないんだから。」

いつもは犯人を追い詰めるコナンが追い詰められるとはなんという皮肉であろうか。結局コナンはこの後全て包み隠さず喋らされることとなる。

## 蘭vsコナン（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

### 3人の心

結局、コナンは全てを喋った。いや、実際には喋らされたと言った方が正しいか。

とにかく彼はこれまでのことを喋った。トロピカルランドで起きた事件の時薬で小さくされたこと。黒の組織のこと、そしてやつらの情報を仕入れやすくするため、毛利家に転がり込んだことである。「まったく。私がどれだけ心配したかは、側にいたからわかっていくわよね新一？」

すべてをコナンが話し終えた後の蘭の第一声である。やはり真実を知った蘭の言葉は少し怒気を含むものである。

「わかってるよ。けど、お前を守るためにはしかたなかったんだ。」

コナンとしてはそれ以外に言う言葉がない。それに、どうしても負い目を感じてしまう。

一方の蘭は、表情を堅くしたままだ。相当怒っているのがわかる。彼自身としては、これでもう蘭との仲は修復不能な物になってしまったかもしれないと覚悟した。

しかし、蘭は表情を柔らかくしてコナンと向き合う。

「けど、私のためを思ってそうしていたなら許すわ。それよりも、新一が無事でよかった。」

そう言って満面の笑みを浮べる蘭。

その言葉に、コナンは救われる思いがした。そして、その時彼には蘭がまるで女神の样に見えた。

「蘭……ありがとう。」

コナンの顔が赤い。

「私は新一が元に戻るのをずっと待っているから。だから、絶対に元に戻ってよ。」

遠回しであるが、告白に近い言葉。コナンの顔がさらに赤くなる。「あ、ああ。」

二人の周りの空気はまさに桃色だ。もつとも、見ているナギ、ハヤテ、マリアとしてはあんまり長いこと付き合っていたとは思えない光景だった。見ているだけで恥ずかしい。そこで、ナギが話題を変える。

「取り敢えず、コナンのことはわかったから、次行くぞ。次。」

というわけで、お次の尋問対象は怪盗キッドである。

尋問するのはズバリ、ナギである。

一方のキッドは自分がこのまま警察に引き渡されないか心配しているようだ。それを、ナギも察した。

「安心しろ。必要なことさえ喋れば警察には引渡しはしない。単刀直入に聞こう、なぜお前は私の屋敷の宝石を狙ったのだ？」

「……」

キッドは何も言わない。

「ただのおもしろ半分でか？」

この言葉に、キッドは強く反応した。

「冗談じゃねえ！！好きで泥棒なんかやってねえよ！！」

そう言うキッド。そこへ、会話にコナンが割り込んだ。

「キッド……お前は確か今まで盗んだ宝石を全て返してきたよな。どうしてだ？そしてお前は愉快犯でもない。一体何が目的なんだ。」

コナンが問い詰める。しかし、まだキッドは話そうとしない。そこで、ハヤテが言う。

「キッドさん。知られたくない話かもしれないけど、案外話した方が気が楽になるってこともありますから、話してはどうです？大丈夫、ここににいる人たちはみんな信頼できますよ。僕が保証します。」

お得意の営業スマイルで言うハヤテ。これにはキッドもなんとなく話が話す気になってしまふ。そして、彼は喋り始めた。

「わかったよ。俺が宝石を盗む理由は……」

キッドは父親のこと。その父親がパンドラという宝石を追って命を落としたこと、そして今自分は父親の出来なかったことを成

し遂げようと怪盗キッドをしていることと、そして父親を殺した犯人を追っていることを話した。

「それは、またすごい重たい話ですね。」

話させてしまったハヤテに少し罪悪の心が生まれる。しかし、逆にキッドの方は表情を綻ばせる。

「いや、あんたの言ったとおり、逆に言ったことで楽に成ったよ。」  
快斗自身不思議と落ち着けた。もしかしたら彼はこのときを待っていたのかもしれない。

「しかしお前たち3人はよくそんな人生送ってられるな、感心するよ。」

ナギが誉めているのだから、バカにしているのかよくわからない台詞を吐く。しかし、コナンとキッドには3人という言葉が気になった。

「「3人？」」

「ああ、ハヤテのことだよ。ハヤテは去年のクリスマス、親に一億五千万の借金を押付けられて、借金取りに売られてしまったんだからな。」

その言葉に、コナン、蘭、キッドの3人はただ驚くしかなかった。



### 3人の心（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

## パンドラ

ハヤテの過去についての話を聞き終えた時、コナン、キッド、蘭の3人は驚きを隠せなかった。まあ16歳の少年が一億以上の借金をしているなど、予想するほうが難しい。

「すげえ!!」

「本当に人身売買って存在したんだ!!」

「かわいそう!!両親に売られちゃうなんて。」

それらの言葉に対して、ハヤテは苦笑いした。

「ハハハ・・・まあそうやって労わってもらえるだけでもありがたいです。」

顔は笑っているが、言葉の所々に何か恨みや寂しさの様な物が感じられる。そのため場の雰囲気が一気に暗くなってしまった。そこで、話を先に進める意味も含めて、ナギが話題を変える。

「まあそれはそれとして。で、キッド。いや本名は快斗だったな。

快斗、もし私の宝石がそのパンドラだったらどうする気だ?」

ナギが聞く。それに対し、快斗は少し複雑な表情をする。

「それはまあ、最初は粉々に砕くつもりだったけど・・・」

しかし、それは困るのだ。なぜならダイヤはナギにとって数少ない母からの形見であるのだ。それを知っているハヤテやコナンは厳しい視線を向けている。ちなみに、快斗は既にその説明を受けている。

「取り敢えず現物を見ないことには・・・。」

とりあえずそう言ってお茶を濁す快斗。

「まあそれもそうだな。とりあえずお前に見せよう。シラヌイ!」

ナギに呼ばれ、一匹の猫が現れた。

「ニャアア!!」

シラヌイはナギの膝の上に飛び乗った。

最初他の人間はなぜ彼女がシラヌイを呼びつけたのかわからなか

った。しかし、すぐにその首元に小さな袋が掛けられているのが見えた。

「お嬢様。シラヌイに持たせていたんですか？」

「ああ、こいつなら勝手に歩き回ってくれて、わざわざどこかに隠す必要もないからな。」

そしてナギは袋からダイヤを出した。

「さあ、見るといい。」

快斗にダイヤを渡す。

「あ、ありがとう。」

受け取ると快斗は窓際に行く。今日は晴れていてちょうど月が出ている。その月に、彼はダイヤを翳す。結果は直ぐに出るはずだ。

全員がその様子を固唾を飲んで見守った。

そして、数秒後快斗が言った言葉は……

「パンドラだ!!」

その言葉に、全員複雑な心境になる。

「これで快斗君の目的が達成されたわけね。けど……」

そっという蘭はちらりとナギの方を見る。

「……………」

ナギ自身は押し黙って何も言おうとしない。

そこで口を開いたのはハヤテであった。

「快斗君。どうかその宝石を割らないで欲しいんだ。それはさっきも言ったけど、お嬢様が5歳のとき亡くなったお母様の数少ない形

見。だからお願いします。もし君がナギお嬢様がその宝石を悪用すると不安に思うなら、それは絶対無いと僕が保証します。」

続いてマリアも言う。

「私からもお願いします。ナギは確かにわがままで自分勝手に負けず嫌い、学校にもあまり行かないHIKIKOMORIですけど、根は優しく、物の道理はわきまえています。だからお願いします。」

前半の言葉にナギはムツとしたが、まあ一応後半で誉めていることと、場が場なのでナギは何も言わなかった。

一方の快斗はしばらく何事か考えていたが、直ぐに振り返って言った。

「わかりました。お二人の言うことを信じましょう。それに、俺にはその娘の思い出を粉々にする権利はないので。」

快斗はナギの側に寄っていき、そして宝石を返した。

「ありがとう。」

しかし、懸念はまだあった。

「けど、その宝石を狙って他の連中が狙ってくるんじゃない？」

その懸念を言ったのはコナンである。

しかし。快斗が否定した。

「いや、他の人間に言わなきゃ大丈夫だって。それに、この屋敷の警備網を掻い潜れる奴なんていないと思う。」

つい先ほど痛い目に遭わされた快斗の言葉には重みがあった。

そして間もなくS.Pの事務所から連絡が入った。その内容が事態を思わぬ方向に持つて行くこととなる。

## パンドラ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 不審者

SPの事務所からナギの携帯に連絡が入った。

「私だ、どうした。何かあったのか？・・・うん・・・何！不審者を捕まえた。ちょっと待ってくれ！」

ナギは会話の内容を部屋全体に聞こえるよう接続しなおす。本当なら別にその必要はないのだが、なぜかそうした。そして、これが結果的には大正解の行動だった。

「いいぞ。続きを話してくれ。」

ナギの言葉と共に、SPの隊長が報告を始めた。

「では申し上げます。侵入者は計5名。いずれも真つ暗な装束を着込んだ屈強な男です。塀を越え侵入したところを警備ロボットがミサイルと機関銃で攻撃、屋敷への侵入を阻止しました。結果1名重体、残る4名も大なり小なりの怪我をしています。重体者は先ほど病院へ送りました。ですがね、こいつらちょっと変なんです。」

最後の言葉をSPの隊長が怪訝な声でそう言った。

「変？何が変なのだ？」

「はい。全員口の中、正確には歯の中に、毒を仕込んでいたんですよ。おそらく猛毒の青酸カリと思われるが。強いかむと弾ける仕組みだったようで。もちろん噛む前に抜き取りました。」

と、そこでコナンが強い反応を示した。

「何！？」

いきなり大きな声をあげたコナンに驚く蘭。

「どうしたのよ新一！？」

「いや、以前飛行船で起きた事件で組織の奴に会った事があるんだけど、そいつは歯に仕込んだ毒で自殺したんだ。」（詳しくはコナン特別編26巻）

ということはまさか？先ほど二人の話を聞いていたナギは、すぐに気の利いた質問をする。

「おい、そいつらは何か持っていないかったか？」

すぐに、S Pの報告が帰ってきた。

「はい。武器らしい物はナイフとスタンガンと言った、おおよそ殺傷能力の低い物を持っていました。あとはピッキングの道具やら、主に盗難に使う物ばかりです。ただ・・・リーダー格と思われる男が不審な薬を持っていました。」

ナギはその言葉を聞き逃さなかった。

「薬？」

「はい。カプセル錠なんですが。ただの薬ではないようで、明らかに怪しかったので、今科学班へ回して解析を急いでやって貰っています。」

ここまでの会話を聞いてコナンと快斗にまさかという思いが走る。そして二人が会話に割り込んだ。

「その男の特徴は？」

「何か言わなかったか？」

いきなりの乱入にS Pは大いに驚かされた。

「うわ！！いきなり回線に乱入しないで下さい。ええと、男は全員暴れたため今は鎮静剤を打って寝かしています。特に何か言った様子はありません。ただ顔については今からそちらに画像を送るので見てください。後、警備ロボットのレコーダーも一度調べて見ます。後ほどそちらも報告しますので。恐らく30分もすれば終わると思うので。では、一旦ここで切ります。」

こうしてS Pの報告は終わった。すると直ぐに、部屋のテレビに画像が送られてきた。

それを快斗とコナンは見る。そして、1人の男を見た途端、快斗が声を上げた。

「こいつスネイクだぜ！！間違いない！！」

なんと、その男は快斗の宿敵、そして父親の仇のスネイクだった。コナンの方はどうだ？」

ナギがコナンに聞いてみる。しかし。

「いや、俺には見覚えはない。けど、さっきの薬が気になる。」

もしかしたら、A P T X かもという予感がする。

「まあ家の科学班に回したのなら、多分1時間もすれば結果が出るぞ。」

「「ええ!!」」

そのナギが言った言葉にただ驚く二人。そんなに早く解析を終えるなど警察でもF B Iでも不可能だ。

信じられない!!といわんばかりの二人に、ハヤテがこう言った。

「ここでは世間一般の常識は通用しないと思った方が良いでしょう。」

二人はその言葉にただ納得するしかなかった。



不審者（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## スネイク

10分後、SPの事務所から再び連絡が入った。

「リーダー格と思われる男が目覚めました。いがいたしましよう?」

どうやらスネイクが目覚ましたらしい。

「よし、だったら直接やつに聞いてやる。」

そう言っただち上がったのは快斗だった。どうやら父親の殺した相手と直接話したいようだ。

それに続くように、他の人間も席を立つ。

「ようし、私もそいつから侵入した理由を聞き出してやろう。」

「お嬢様がいくなら僕も。」

「じゃあ俺も。」

「私も行くわ新一。」

結局、最終的にハヤテ・ナギ・コナン・快斗・蘭の5人で行くこととなった。ちなみにマリアがメンバーの中にいないのは、麻酔針を喰らってまだ眠っている咲夜と伊澄が起きた場合に備えて残るからだ。

というわけで、5人は屋敷のはずれにあるSPの詰め所へと向かった。

そこで最後の最後。ハプニングが起こるという事も知らずに。

一方、目を覚ましたスネイクはというと。

(どじったぜ。)

今の彼は縄で両手を縛られ、口には舌を切って自殺しないよう猿轡が噛まされていた。

（せめて拳銃さえあればあんな無様な真似をしなかったのに・・・）  
今回、あの方の指示で持つことが許された武器は殺傷性の低い小型ナイフだけで、後はスタンガンのみ。防弾チョッキや音響閃光弾の携行は認められたが、そういうのは防御用の物で、今まで手荒い方法でやってきた彼にしてみれば物足りないの一言である。しかも、誰一人として殺してはいけないという条件まで課せられてしまった。まあ、これだけであの方がどれほど三千院家を恐れているかがわかるのだが、スネイクとしては一度やると決めたことをここでやめるわけにもいかず、最精鋭の部下を引き連れ三千院家に赴いた。

もつとも、結果ははつきり言って片道攻撃の、いわば特攻になっ  
てしまった。進入した途端、警備ロボットの機関銃とミサイルの集中攻撃を受け、全員屋敷に近づけぬままやられてしまった。もし防弾チョッキを着てなかったら、恐らくスプリンター（破片）で体をズタズタに裂かれてしまっていただろう。

警備ロボットの攻撃が終わった後はあっという間にSPに包囲され、全員捕まってしまった。相手の数はこちらの5倍はいたであろうし、おまけに全員小銃を持った完全武装であった。勝てる筈がなかった。

さらに悪いことに、自決用の仕掛け歯を噛む前にSPに強打され、そこで気絶してしまった。

目を覚ましたときには、今の状況となっていた。正に最悪の状況である。

（さてどうした物かな？）

このまま警察に引き渡されても、おそらく組織に暗殺されるのがおちである。かといって今の状況から脱出するのも不可能であった。どっちに転んでも最後には地獄行きであった。

（なんとか脱出できる方法を）

思案してみるが、いい案がパツと出るはずがない。  
と、そこで部屋の外が賑やかになった。

（警察か！？）

しかし、それは直ぐに間違えとわかった。なぜなら明らかに若い男女の声が聞こえてきたからだ。

ちなみに今彼がいるのは刑事ドラマで良く見る取調室ぐらいの小さな部屋だ。

と、そこであることに気付いた。

（縄の結びが甘い！チャンス！！）

彼は手を器用に動かして縄を解きに掛かった。そして、縄は10秒ほどで解けた。

（よし！！）

そして、さらに都合のいいことに、このような会話が聞こえてきた。

「じゃあ入れてくれ。」

「賛成できませんが、お嬢様の頼みなら仕方ありません。」

明らかに10代ぐらいの少女の声。しかも中に入ってくるらしい。

（まだツキは落ちちゃいねえぜ。）

そして、部屋の扉が開いた。

## スネイク（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 応酬

ハヤテ達一行は、スネイクが閉じ込められている部屋の前までやってきた。

「では開けてくれ。」

ナギの言葉と共に、S Pが部屋の扉を開ける。

「あんまり気は進みませんがね。」

ブツブツ文句を言いつつも、命令は命令なのでS Pは扉を開けた。  
「どうぞ。」

S Pの先導を受けて、ナギが最初に部屋の中へ入った。

だが、ここで全員が全く予想していなかった事態が起きた。

縄で縛られていたはずのスネイクが、縛られていた椅子から立ち上がったかと思った次の瞬間、S Pが腰につけていた拳銃を奪った。  
「何!!」

そしてその勢いをつけたまま、ナギに拳銃を突きつけた。そして、その片腕を首に回して拘束する。

「お嬢様!!」

「ナギちゃん!!」

「あ!!」

全員が驚いているのを尻目に、スネイクはあっさりとナギを人質に取ってしまった。

「全員その場を動くな!!少しでも動いてみる、このお嬢ちゃんの頭に風穴が開くぜ!!」

スネイクが勝ち誇った顔をする。

もっとも、コナンたちとて何も考えていないわけではなかった。

コナンは時計型麻醉銃をいつでも撃てるようにする。

それに気付いた快斗は、コナンが撃てる体勢を作るまでの時間稼ぎを始めた。

「スネイク、相変わらずやることが汚いな。」

快斗のその言葉に、スネイクは強く反応した。

「何で俺のコードネームを！？まさか、お前が？」

すると、快斗はいつもの怪盗キッドの不適な表情をする。

「そうです。私が怪盗キッドですよ。」

その台詞に、スネイクは一瞬驚いた表情をしたが、すぐに元の顔に戻る。

「ほう。変装ではないようだな。そういえばあの男（盗吉）には息子がいたな。つまり父親の跡をついだって事か。あの男も中々いい息子を持ったようだな。」

「ふん。スネイク、どうせ無駄だ。おとなしく投降しろ！」

とりあえず駄目元で説得してみるが、そんな説得にのるようでは悪党とはいえない。

「ここで投降したところで、殺されるのが落ちだからな。こうなったらとことんやるまでよ！」

全く聞く耳を持たない。

「あんたを殺すとするならジンか？それともベルモットか？」

さらなる動揺を誘うべく、今度はコナンが言った。

「何！坊主、お前何者だ！？ただの小学生ではあるまい。」

「江戸川コナン探偵だ！！」

一応本名は隠しておく。しかし。

「コナン……ああ、確か毛利探偵事務所に居候して、キッドを打ち負かしてきたな。最近組織が色々調べて、もしかしたら工藤新一の幼児化した姿だなんて説が出たな。よくあるヨタ話かと思っていたが、どうやら真実のようだな。」

コナンとキッドはここで重要な情報を手に入れた。なんと組織はもうコナンの素性を大分掴んでいたようだ。

一方、スネイクの方も動揺するどころか、逆に自信を深めた。

「しかし良い話を聞かしてもらったぜ。それだけの情報をもって帰れば、今回の失敗は帳消しだぜ！」

しかし、そこで一瞬気が緩んだ。すかさずコナンがその隙をつい

て麻醉銃を撃ちこんだ。

「うー!!」

麻醉針が命中してぐったりとなる。

「「「「「あー!!」「「「「」

全員がそろってそんな声を上げた。そして表情からまずい事態が起きたことがわかる。

なぜそなったのか？麻醉針が当たって眠りこけたのは、実はスネイクではなかったからだ。

なんと、人質になっていたナギの方である。

「やべ!」

「コナン、もう一発!!」

「今ので最後だ!!」

実は、連発可能とは言っても、やっぱり小さな腕時計の容積などたかが知れている。3発しか装填されていなかった。咲夜と伊澄に一発ずつ。そして今のが最後であった。

ピンチ!!



## 応酬（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 逃亡者

コナンがスネイクを狙って撃った麻醉針が、こともあろうにナギに当たってしまった。これは撃ったコナンやそれを見ていた快斗たちにとっても大きな誤算であった。

もっとも、予想外の事態に困惑したのは、ナギを人質にとっていたスネイクも同じであった。

考えてみれば、ナギが眠ってしまったということは、ナギは自力で立っていけないという事に他ならない。つまりスネイクは彼女が倒れないように支えなければならない。30kgもない彼女といえど、やはり重荷になるのは変わりない。これでは人質としての価値はなくなり、それどころか余計な荷物を背負い込んだに等しい。

（さて、どうしたものかな？）

アクシデントはつき物とはいえ、こういう事態はあまりない。スネイクはしばし考え込む。しかし、さすがに場数を踏んでいる悪党だけある。すぐに切り抜ける手段を考えた。

「おりゃー!!」

スネイクは最大限の力を込め、抱えていたナギを投げ出した。投げ出した方向には、コナンと快斗が並んでたっていた。

「あー!!」

いきなりの予想外の行動に声を上げる二人。だが、すぐに彼女を受けとめようとした。が。

「お嬢様!!」

執事としての性か、ハヤテが素早く動いてしまった。もちろん、その動いた先にはコナンと快斗が立っていたから、結果は……ゴッソッ!!

大見事に3人が衝突し、そして倒れこんだ。さらに悪いことは重なる。

バタ!!

ナギが倒れた3人の上に折り重なるように倒れこんだ。

「ゴフ！！」

3人、特に一番下に倒れている快斗にすさまじい力がかかった。（ハヤテ+コナン+ナギ）3人ともしばらく動けなくなってしまう。それを見ていた蘭もSPも啞然としてしまった。

その油断を突いて、スネイクは逃亡した。

「あばよ！」

「あ！あいつが逃げちゃう。ちよつと皆起きなさいよ！！」

蘭の叫びがむなしく木霊する。

「作戦成功！！」

一方、勝者の笑みを浮かべ逃げ出したスネイク。あとはここから逃げるのみ。

SPも追いかけてくるが、狭い場所で銃を撃って兆弾になることを恐れているのか、銃撃はない。

もはや彼を止める者はないのか。

しかし、スネイクの幸運もここまでだった。

角を曲がったところで、突然後頭部に衝撃が走った。

バシ！！

「痛い！！何だ！？」

慌てて振り返ると、さっき人質にしたのと同じぐらいの少女がハリセンを持って立っていた。咲夜だった。ようやく目覚めた彼女が馳せ参じたわけだ。そして騒ぎを聞きつけ、ハリセン持って待ち伏せていたのだ。

「関西人をなめたらあかんで！！」

関西弁丸出しで言う少女。しかし。

「って無視かいな！！」

スネイクはそんなもの無視して再び走り出した。かまっている余裕など、一秒もないのだ。

まだ後頭部が痛い。

「まったく、最初のロボットといい、この屋敷はどうかしてるぜ！

！  
「

愚痴をこぼしつつも、とにかく屋敷からの脱出のため、スネイクはひた走るのであった。

## 逃亡者（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

## 波状攻撃

「一体どうなっているんだ？この屋敷は？」

場数を踏んできたスネイクではあるが、こんな異常な状況初めてである。

「もしかして、あの方はこのことがわかっていたのか？」

それならば侵入することを中々許可しなかったのも頷ける。もっとも、本当の理由は違うが。

とにかく、咲夜のハリセン攻撃にもめげず、彼はとにかく逃げる。しかし、再び異常な状況が彼を襲った。

目の前に少女が現れた。しかも、その少女は今となっては珍しい和服を着ている。

「今度はなんだ？」

と、その少女が袖から何やら出すのが見えた。お札ぐらいの大きさの紙だ。そして、その紙を手を持ち、こちらに向けてきた。

ここで、ここまでの異常な状況の連続から、彼の直感が働いた。少しばかり体を右によける。

その瞬間。

「八葉六式・・・撃破滅却。」

少女・・・伊澄が呪文を唱えた途端。凄まじいエネルギー波が彼のさっきいた場所に襲い掛かった。もちろん、スネイクは寸前にかわしていたから無事である。エネルギー波はその後ろの壁を破壊するだけに終わった。

「うおおおお！！」

そんなバカな！！と思ひながら叫ぶスネイク。

「あ、外しましたね。」

一方の伊澄は、さらっと表情一つ変えず言ったが、はつきり言っ  
てしゃれになっ  
ていない。なぜなら服の袖がこげている。もしあの  
時避けてい  
なかつたら、確実に大怪我していただろう。

「冗談じゃねえぜ!!」

再び全速力で逃げるスネイク。

今まで危険な場所に身を置いてきたが、ここまで死を直感したことはなかった。

「とにかく一刻も早く脱出しないと、殺されちまう。」

今までさんざん人を殺してきている彼だが、武器がなければ情けないほど弱い。まあ肉体的にも強いのだが、あいにくと三千院家ではその強さのレベルが尋常でなかった。

彼は再び出口目指して走り始めた。

すると、またしても予期せぬ事態が。

「勘弁してくれよ!」

目の前に現れた若いメイドさんだった。

「しかし、相手がメイドさんなら大丈夫だろう!」

今回は余裕の笑みを浮かべる。そのメイドさんをスルーしようとした。しかし、すさまじい衝撃が彼を襲った。

「うわあああ!!」

そしてそのまま投げ飛ばされた。地面に叩きつけられるスネイク。

「な、何だ今のは!」

よるめきながらそういう彼。

その答えをしてくれたのは、彼を投げ飛ばしたメイドさん……マリアだった。

「ただの形意拳ですわ。護身術程度の浅学ですから不意打ちぐらいにししか使えませんわ。」

油断した。まさかメイドさんがそんな技を使えるなんて。

「もう逃げても無駄ですよ!死にたくなかったら、おとなしく投降したらどうです。」

マリアがなんとなく恐ろしい感じの言葉を混ぜた投降勧告をしてきたが、あいにくとまだスネイクは諦めていない。

「御忠告ありがとうメイドさんよ。だが、あいにくと悪党つてのは諦めが悪くてね!!じゃあな。」

というわけで再び逃走。そしてまもなく建物内からの脱出に成功した。

辺りを見回すが幸いSPの姿はない。しかも、都合のいいことに目の前には自動車は何台かならんでいた。SPたちが屋敷内の移動用に使うジープであった。さら車内を見してみると好都合なことに鍵がささったままだ。

「ラッキー!!」

彼はその内の一台に乗り込んだ。急いでエンジンをかける。

エンジンが掛かったところで、建物内からわらわらと人が出てくるのが見えた。すかさず、アクセルを踏み、その場から逃げる。

その様子は、追いついたハヤテやコナンからも見えた。

「……しまった。」

延長戦の突入であった。



## 波状攻撃（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 追跡

スネイクが車で逃走した直後、コナンやハヤテたちが建物内から出てきた。

彼らの目に入ったのは、走り去っていく車であった。

「畜生！車を使って逃げたか！」

コナンが吐き捨てるように言った。

「自転車はないですか？」

他の人からすれば一見意味不明なハヤテの発言。もともと、マリアラハヤテをよく知っているものならその意味はすぐにわかる。

ハヤテの体力は化け物なみだ。なにせ夜の首都高を屋形車を引いた通常型の自転車で80kmのスピードを叩き出せるのだ。

だが、あいにくとSPの詰め所には自転車は置いてなかった。

走って追いかける手もあるが、さすがに疲れるので必殺技を使う前には遠慮したいものである。

「残っている自動車を使えばいいじゃないんでしょうか？」

意外や意外。そう意見を言ったのは伊澄であった。

さっそく、SPたちをせかして車を出させようとする。残っている車は5台。しかし、いざ動かそうとすると、そうは問屋が卸してくれない事態となった。

「大変です！タイヤがパンクさせられています。これでは動かせません！」

5台中4台のタイヤが銃によって撃ち抜かれていた。これでは動かせない。

残る1台にしても、4人乗りだから定員オーバーだ。

「何か代わりは！？」

そこで、快斗が駐車場の片隅にサイドカーがあるのに気付いた。これなら運転経験もあるから使える。（ちなみに、サイドカーは通常のバイクより運転しにくいといえます。）

「これ使えますか？」

SPの1人に訊ねる。

「ああ。」

さっそく快斗が駆け寄る。すると、以前一緒に乗った経験があるコナンも急いで駆け寄った。

ところが、近づいて見ると意外なことがわかった。

「何だこれ！機関銃が付いているぞ！それにこいつは相当な旧式だ！」

コナンが驚きの声をあげた。

側車の前面に機関銃が取り付けられていた。それにバイク自体、まるで映画に出てくるような古めかしい物だ。

すると、後から来たSPが説明した。

「それは旧日本陸軍の1939年式側車型陸王です。以前帝様が趣味で集めた物をレストアしたもので。機関銃は96式7.7mm軽機関銃で、いつでも撃てるようにしてあります。」

なんと旧帝国陸軍のバイクであった。確かに注意してみると、側車の前には星マークがついている。

と、武器がついていると聞いたことでハヤテが寄ってきた。

「だったら僕が側車に乗ります。機関銃の扱いには慣れているので。」

「そう言うやいなや、側車にハヤテが飛び乗る。」

「機関銃の扱いに慣れてるって……」

コナンと快斗が哑然とした表情でハヤテを見る。

「2、3年前に歳偽ってフィリピンで傭兵やってましたから。拳銃、小銃、機関銃、大砲、携帯式のミサイルならひとつり使えます。」

さらっと言うが、もちろんあまりに常軌を逸脱した発言である。

コナンも快斗も開いた口が塞がらない。

そんな状況下で、SPがやってきた。

「みなさん。連絡用のインカムをつけてください。じゃないと不便ですから。」

そこで我に返る二人。ハヤテを含めた3人はそれを頭につける。こうして色々あったが、ようやくスネイクを追いかけるようになった。

バイクにはハヤテと快斗。車には運転手のSPとコナン、蘭、マリアが乗り込んだ。

咲夜と伊澄は眠りこけているナギの付き添いで残る。

「ようし、じゃあ行くか!!」

エンジンを掛けた快斗が威勢良く言った。

しかし、ここで全員重要な事を忘れていた。それに気づいたのはハヤテだった。

「そっいえば、あの人。どこに逃げたんでしょうか？」

「「「「「あ!!」「」「」」」」」

## 追跡（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

### 三千院飛行場（前書き）

ええ、感想で指摘がありました。この作品では原作にない、作者オリジナルの設定が何箇所もあります。ご注意ください。

### 三千院飛行場

「ええと、わかりました。奴は屋敷の北へ向かっています。」

スネイクが何処へ逃げたかわからず混乱した一同であったが、直ぐに事務所のSPがスネイクの乗った車に積まれているGPSから逆探知して報告してきた。

「よし、それじゃあ取り敢えず北に向かうか。」

エンジンを吹かし、快斗はサイドカーを出した。コナンたちの乗った車も後を追う。

「けど屋敷の北になにかあったかな？」

ふとそんなことを呟くハヤテ。彼自身、屋敷の北に何か外へ逃げられるような施設があった覚えは殆どない。だからハヤテにはスネイクが北へ逃げる理由が見つからない。

「そうですね、屋敷の周りは高いフェンスに囲まれていますし、それぞれの門にはSPが張り付いているから、脱出する方法なんてないんですがね。」

SPも首をかしげている。

そこへ、再び事務所のSPから無線連絡が入った。

「わかりました。奴は一番北の三千院飛行場に向かっています。」

「「「「飛行場！！」」」」

SP以外の全員がほぼ揃って驚きの声をあげた。

「え！？この屋敷に飛行場もあったんですか？」

そんなのハヤテも聞いた覚えがなかった。（実際原作にはありません。作者のオリジナルです。 - 作者注）ヘリポートは何度も使っているからわかつている。しかし飛行場があることは知らなかった。

「有りましたっけ？」

屋敷に長く住んでいるマリアも首をかしげた。

その疑問にはSPが答えた。

「有りますよ。屋敷の一番北端で、ここ最近、少なくとも10年以

上使われていません。帝様がかつてこの屋敷に住んでいた時、趣味で集めたレシプロ機を置いておくのに作らせた飛行場です。そんなわけで滑走路も短くて使い勝手が悪いので、ナギお嬢様さえ多分使ったことはないでしょう。確か今は飛行場維持に最低限の人間がいるだけです。」

ハヤテは帝の趣味に呆れると共に、どうしてわからなかったか理解した。何せナギが遠距離移動で主に使うのはヘリコプターで、それも屋敷に近いヘリポートを使っている。知らないはずだ。

「てことは、奴は飛行機を奪って空へ脱出する気か。」

コナンの言葉が全員のインカムに入る。

「そうですね。飛行場自体は最低限の人員しかいないとはいえ、いつでも飛行機は飛ばせる体勢は整っているはずです。機体の状況もパーフェクトに維持されているでしょうし。」

「急ごう！」

S Pの言葉を聞いた快斗はさらにスピードを上げた。

20分後。一行は飛行場に着いた。

三千院飛行場は800m程の滑走路を持つ小さな飛行場だった。だが綺麗に手入れされていて、いつでも使えそうである。

辺りは静まりかえっており、人の気配はない。

「いないなあ。」

「いないわねえ。」

「GPSでの追跡は？」

コナンがS Pに聞いてみる。しかし、彼は首を横に振った。

「あちらも気付いたみたいで、10分ほど前に電波が途絶えたそう。多分車載の発信機の電源を切ったようだ。」



これでは機械の目はもう頼りに出来ない。

「しかたないですね。格納庫を一つ一つしらみつぶしに探しましよ  
う。」

ハヤテが提案したが。案の定。

「……えええ……!」

不満の声が出た。格納庫は飛行場の周りに10個ほどある。これを全部探していたら朝になってしまふ。いや、現実問題日の出まであと20分ほどしかなく、すでに東の空は明るくなっている。

「えええ!」と言われても、他に方法ありますか?」

そう言つと、全員押し黙ってしまった。妙案がパツと出れば苦労しない。

と、その時。

ババババ……

エンジン音とプロペラ機独特のエンジン音が辺りに響いた。

そしてインカムには。

「こちら飛行場管制塔!5番格納庫の機体、エンジンの始動を確認  
!」

### 三千院飛行場（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

疾風の如く！

バババ……

プロペラ機独特のピストンエンジンの音が暁の飛行場に響き渡る。

「5番格納庫はあれだ！！」

コナンが指差した。

全員がそちらに目を向けた。

その格納庫の名からプロペラを回した飛行機が一機出てきた。キヤノピーの大きさからして1人乗りだ。既に明るくなり機体の色ま  
で分かる。薄い緑色に塗られ、胴体に白ぶちの日の丸が描かれてい  
る、まるで戦争映画に出てきそうなやつだ。

それを見て叫んだのはハヤテだった。

「あれ疾風はやてですよ！！」

全員、この言葉の意味が全く分からなかった。

「あのどういう意味？」

コナンが聞いてみた。

「いや、あの飛行機のことですよ。あれは旧日本陸軍の四式戦闘機  
疾風です。」

四式戦闘機疾風。現富重工である中島飛行機が設計、開発した  
機体。世界一小さい2000馬力エンジンである誉を積んで、最高  
速度624kmを誇った。その高性能から大東亜決戦機と称され、  
終戦までの1年ほどの短期間に、日本と満洲で3000機近くが量  
産された傑作機。

「というのが疾風です。」

「君はすごいマニアックなことに詳しいね。」

快斗が誉めているのか呆れているのかよくわからないように言っ  
た。

しかし、そんなことしている間に、その疾風は滑走路に向かって  
進んでいく。

その疾風に乗り込んでいるのはもちろんスネイクだ。

「あいつら追いついてきたな。」

彼の方もコナン、ハヤテたちを確認していた。早く飛び立ちたいところだ。しかし、自動車のエンジンと同じで、いきなり全開にすると壊れかねないので、ゆっくりと出力を上げていく。

「早く、早く。」

一分一秒がもどかしい。

一方、コナンや快斗もどう手を出したら良い物が迷っていた。相手が飛行機に乗っているのでは下手に近づくことは出来ない。一歩間違えればプロペラに切り刻まれたり、機体に体を強打するかもしれない。

「どうする？」

「どうしろって言うんだ。」

二人とも困った。

と、そこでSPが銃を出した。

「これで撃って……」

殺す気満々だ。それを慌てて二人が止める。相手を殺すことはコナンとしては探偵として許すわけに行かないし、快斗はやつに聞きたいことがたくさんあるので、やはり殺すことは許されない。

「ダメ！！それだけは絶対にダメ！！」

「しかしこのままでは逃げられてしまいます！！」

そうこうしているうちに、滑走路の端に疾風が着いてしまう。もう時間がない。

と、ここで。

「快斗君！バイクを出して！！」

ハヤテが言った。

「え！？」

「早く！！」

快斗は言われるままにバイクを出した。

「そのままあいつ後ろについて。」

そして言われたとおりに運転する。距離が縮まる。と、そこで疾風が滑走に入ったのがわかった。

「クソ!!」

快斗が舌打ちした。

一方ハヤテは機関銃の安全装置を外し、初弾を装填した。これでいつでも撃てる体勢である。

それを見て仰天する快斗。

「お、おい!!」

「大丈夫です。殺しはしませんよ!!」

そう言った途端、ハヤテは引き金を引いた。

ダダダダダ・・・

7、8発発射した。ハヤテの発射した銃弾は狙いどおり一箇所に集中して命中した。命中したその場所は、脚だった。それがポキリと折れて、スピードを上げていた疾風は右に傾き、翼が地面に接触した。そしてそのまま止まる。

「・・・やった!!」

全員が歓声を上げた。

だが、スネイクはまだ逃げる気だった。素早く操縦席から這い出すと、走り出した。

「まだ逃げる気だ!!」

「僕に任せてください!!お嬢様に危険な目にあわせた人間を、僕は絶対に許さない!!」

そして、彼はバイクから飛び降り、スネイクに向かって走りはじめた。距離が詰まっていく、そして一定の距離まで近づいたところで、彼自身の必殺技を使った。

「喰らえ!!疾風の如く!!」

凄まじい風が巻き起こり、その技がスネイクに炸裂した。もちろん、大型ロボットさえ倒すこの技を喰らって、さしものスネイクも耐えられる筈がなかった。

「うわあああ!!」

吹き飛ばされた。そして地面に叩きつけられた。

もうとても逃げられる状況ではなかった。

スネイクはそのまま気絶してしまふ。

誰も気付かなかったがその直前、こんな言葉を呟いていた。

「頼む………何でもいいから普通に捕まえて欲しかった……」

## エピソード

三千院家の玄関に、コナン・蘭・小五郎・ハヤテ・ナギ・マリァらが集まっている。スネイクを捕まえた後は警察が来たり、事情聴取に付き合ったりと忙しかったが、昼過ぎにようやく一段落した。そしてコナンたちは米花町に帰ることとなった。

ちなみに、快斗がいないのは、いつのまにか消えてしまっていたからだ。カードをたった一枚だけ残して。

そこにはこう書かれていた。

「またお会いしましょう。怪盗キッド」

カードを見て。

「つたく、キザな野郎だぜ。」

コナンはそう言ったが、その顔には笑みがこぼれていたという。

「もつとゆっくりしていつたらどうだ？ 家にはゲームとか漫画とか一杯あるから。」

ナギがそう勧めたが、コナンたちにはこれから帰ってやることが一杯あるのだ。

「コナン君。あんまり無理をしてはいけませんよ。」

「君のほうこそな。今度会うときは工藤新一として会うことになるのかな。」

コナンとハヤテはお互いそう言って固い握手をする。

その隣ではマリァと蘭が挨拶を交わす。

「お世話になりました。色々あったけど、楽しかったです。」

「またいらしてください。」

そんな光景を少しいらだちながら、今回ほとんど出番なしだった

小五郎が見ていた。

「おい、車が来たから行くぞ!!」

小五郎にせかされ、二人ともしぶしぶ車に乗り込んだ。

コナンたちは窓を開け、最後の会話をする。

「それじゃあ。」

「色々ありがとうございました。」

「また遊びに来てください。」

「いつでも歓迎して待っているぞ。」

「お気をつけて。」

そして、車はいざ米花町へ向け走り始めた。

ハヤテたちが手を振った。

「いっちゃいましたね。」

「また会えるよな。」

「ええ、きっと。」

「ああ!!!!」

10分ほど走ったところで、突然小五郎が声をあげた。

「???」

振り向く二人。

「綾崎ハヤテって名前。どこかで聞いたことあると思ったら!」

「お父さんうるさいわよ。」

「ああ、すまん。サイン貰っておくんだった。」

「うん??」



分け合った秘密。共に過ごした時間。かけがえのない誰かを胸に抱き、人は生きる。世界を越え出会った若者たちが再び自分たちの世界へと戻っていく。歩むべき道を辿って。いつかまた、この広い世界で、きっと会えることを信じて。

イメージOP 「ハヤテのごとく！」 アニメ ハヤテのごとく！  
OP

イメージED 「All of us」 アニメ 銀河鉄  
道物語ED

完

「ってちょっと待てや！！うちの出番って結局なんやったんや！？」

叫ぶ咲夜。

「本当に最近影が薄い。」  
ボソッと呟くクラウス。

「私たちは所詮脇役・・・」  
最後に、冷静に伊澄が言い切った。

本当に完

## エピソード（後書き）

ここまで長々と付き合っていたいただきありがとうございました。自分で書いていても楽しかった作品でした。テストが一段落したら、こんどは失われし物を・・・の方を書きたいと思っています。本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0004c/>

---

コナンvsキッドvsハヤテ

2010年10月9日11時09分発行